

松雲

20

Shoun 2018 March
Shimane University Library Bulletin



ISSN 1882-4900
島根大学附属図書館報
第20号
平成30年3月



淀惣絵図(城下町中心部)
(西尾市岩瀬文庫所蔵)

《論文》

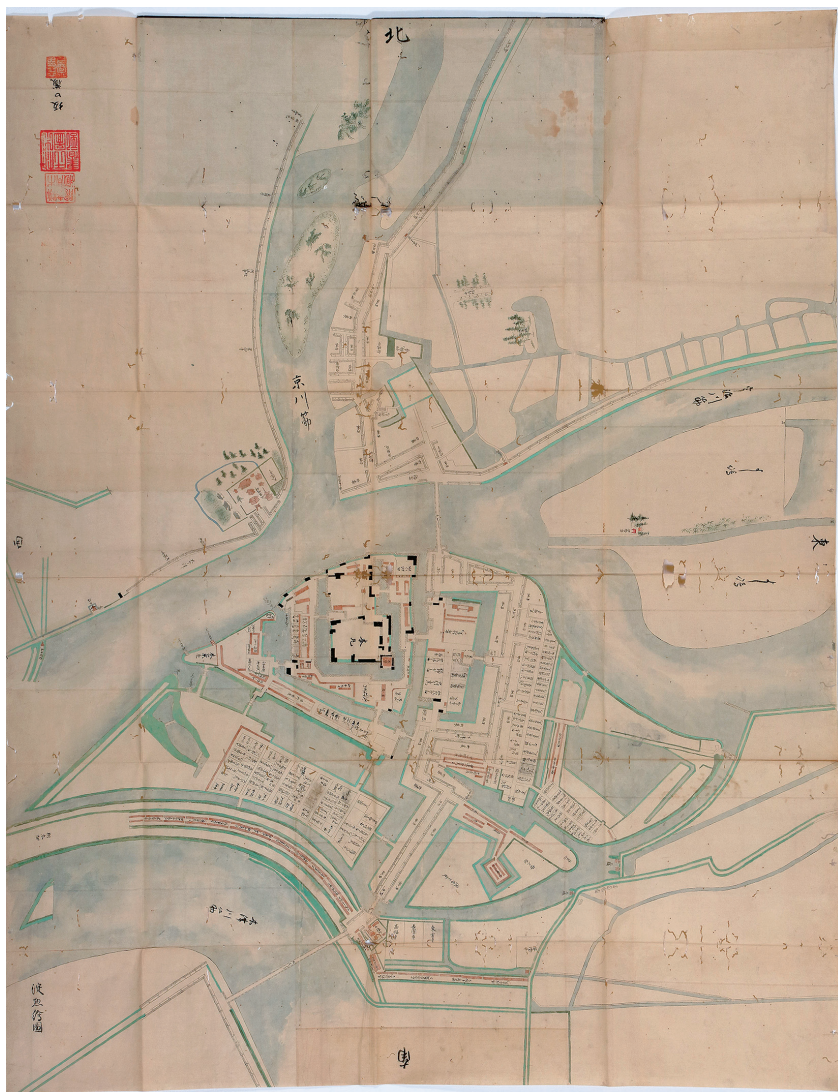
- 畿内における譜代大名城下町の基礎的考察(1)
船杉 力修

《報告》

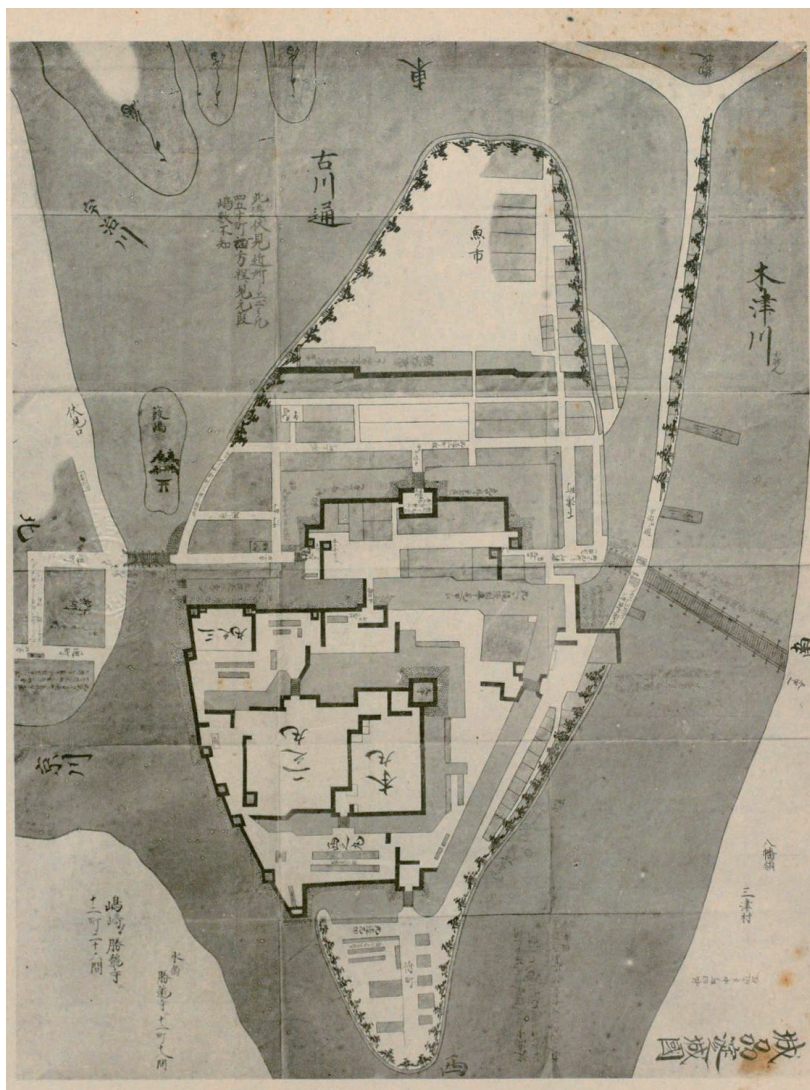
- 教科書データベース初期構築の完了と企画展示
昌子 喜信
- 2017年度島根大学附属図書館企画展示
小林奈緒子
- 地域コミュニティラボ
昌子 喜信

《自著紹介》

関 耕平・橋本佳奈・深見俊崇・
木下芳一・田中直人



淀惣絵図（全体）
（西尾市岩瀬文庫所蔵）



城品定之図（『濃城温故会第九回報告』所収）

松雲

第20号 2018.3.28 発行

《論文》

畿内における譜代大名城下町の基礎的考察（1）

—山城国淀を事例として— …… 船杉 力修 4

《報告》

教科書データベース初期構築の完了と企画展示

「島根大学教科書コレクションにみる教科書のあゆみ」 … 昌子 喜信 37

2017年度島根大学附属図書館企画展示

「戦争と平和を考える2017－記録された戦争体験－」実施報告 … 小林奈緒子 51

地域コミュニティラボ —地域の情報を発信する展示スペース—

…………… 昌子 喜信、高須 佳奈、中野 洋平 67

《自著紹介》

山陰研究ブックレット6 三江線の過去・現在・未来…………… 関 耕平 83

三江線BOOK…………… 橋本 佳奈 85

パワフル・ラーニング：

社会に開かれた学びと理解をつくる…………… 深見 俊崇 87

プリンシプル消化器疾患の臨床1

食道・胃・十二指腸の診療アップデート…………… 木下 芳一 90

ユニバーサルトイレ…………… 田中 直人 92

畿内における譜代大名城下町の基礎的考察（1）

—山城国淀を事例として—

島根大学法文学部社会文化学科准教授 船 杉 力 修

1. はじめに

本稿は、畿内における譜代大名城下町について、17、18世紀の山城国淀（現在京都市伏見区）を事例として、歴史地理学の立場から考察を行うものである。分析で主に使用する絵図は、淀藩主が永井家であった時代のもものとされる2枚の絵図、(a) 愛知県の西尾市岩瀬文庫所蔵の「淀惣絵図」（寅-65）¹⁾と、(b) 京都大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵「淀城大絵図」（7.01.07.11//23）²⁾である。

譜代大名の城下町のうち、淀を研究対象としたのは、まず、筆者の所属する島根大学法文学部社会文化学科地理学研究室において、今年度の法文学部専門教育科目「地理学実習Ⅰ」、「地理学実習Ⅱ」で、京都府を対象にしたフィールドワークを実施したことと関係している。実習には、同研究室の2、3年生の学生が参加した。そのうち学生1名が歴史地理学の視点から、城下町淀を調査対象としてフィールドワークを行った。本稿の対象とする城下町淀の2枚の絵図は、学生への指導、助言の過程で確認したものである。このうち、(a)「淀惣絵図」は従来の城下町淀の研究で取り上げられていない絵図であること、そして武家屋敷の人名など記載内容が(b)と大きく異なっていたことから、城下町淀の復原にあたって、いずれも重要な絵図であることが判明した。そこで研究対象として取り上げることにした。

次に、学生への指導、助言の過程で、先行研究を調査した結果、城下町淀に関する研究が少ないことも判明した。京都市内では、世界遺産に登録されている都市京都そのものに関心が多く集まる一方で、城下町淀は京都から縁辺にあたること、そして平安京形成以降の長い歴史をもつ京都に比較すれば、その歴史は江戸時代以降と短いことなどによって、従来の研究では注目されてこなかったと考えられる。

そうしたなかで、従来の研究として、まず挙げられるのは、境幸政・荻原信一の『城と陣屋3 山城淀城』所収の「淀城と淀藩」である³⁾。そこでは、松平定綱の築城、淀城の規模と構造、永井尚政の城地改修、淀藩主の系譜、淀城下町の概要、幕末付近の淀城について、それぞれ概略的に説明した上で、「淀城付近の史跡」として5ヶ所を取り上げている。前者では、永井尚政の城地改修が、後者では、江戸時代の豪商淀屋辰五郎の別荘伝説地が詳細に説明されており、いずれも本稿で取り上げる内容を詳細に記載していることが注目される。

次に、阿部宏は、享保8（1723）年から廃藩まで淀藩主であった稲葉家の家臣渡辺氏所蔵の寛延3（1750）年「山州御城府内図」をもとに、淀城の城郭、堀、城下町、水車小屋、舟渡など、城下町淀について基本的な考察を行っている⁴⁾。従来の研究では、この稲葉時代の「山州御城府内図」が主に使用されてきた。

最近では、建築史の小林大祐が、城下町絵図をもとに、寛永14（1637）年前後の城下町の復原図を作成し、木津川の流路変更による城下町拡張工事前後の状況を解説しているほか、拡張工事以後の景観を現在の地図で比定して、城下町の街区や道を現在でも見出すことができる⁵⁾としている。淀では、近代以降の市街地化により、本丸以外には淀城跡の状況が確認できないなかで、現在との比定図の成果は、城下町の痕跡を探る上で注目される。また、小林は『淀の歴史と文化』において、城下町絵図の写真や復原図を多数掲載して、城下町淀の成立と変容について、目で見ても理解できるように配慮している。同著は、江戸時代の城下町淀の状況を押さえる上で基本的な文献であるといえる。

しかしながら、従来の研究では、城下町全体の景観復原は行われているものの、絵図の記載内容、特に居住者が記されている武家屋敷の人名や、寺社などの位置など、城下町絵図の分析にあたっての基礎的な研究手法である、絵図の解説及び絵図と文献史料との照合といった分析がほとんど行われていない。城下町淀の特徴を捉えるためには、こうした基礎的な調査手法が重要であることは言うまでもない。

城下町淀の発展を考察するにあたって、特に重要な時期は、小林が復原図を作成したように、木津川の流路変更による城下町拡張工事が行われた寛永

14 (1637) 年前後であるといえる。この城下町拡張工事を行ったのが、当時の藩主永井尚政であった。したがって、永井時代とされる2枚の絵図の解説が、城下町淀の研究にあたって重要な課題であるといえる。また、永井時代の淀には、城下町絵図のうち、武家屋敷の分析で使用する分限帳が残されていないものの、城下町淀の町方で年寄役をつとめた藤林家所蔵の『山城淀下津町記録』⁶⁾があり、江戸時代の淀を分析する上で最も重要な史料の一つ⁷⁾とされている。しかしながら、城下町絵図との照合などは行われていないので、こうした基礎的な作業が必要であるといえる。

さらに、本誌『松雲』の編集方針（大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果の掲載）に沿って、本稿では城下町絵図の書誌学的な分析もあわせて行うこととする。具体的には、武家屋敷や町人地、寺院、神社など城下町絵図の基本的な記載内容の分析だけでなく、絵図の伝来の経緯なども分析することとする。というのも、本稿の対象とする淀の城下町絵図のうち、永井時代の絵図とされる(a)(b)には、作成者や作成年代といった絵図の基礎的情報が記されていない。したがって、絵図の書誌学的な側面、すなわち、印記や墨記の記載内容の分析、そして、同系統の絵図との対応関係などの分析が必要であると判断した。また、従来の城下町絵図の研究では、城下町の地元に残る絵図を中心に分析されていたが、最近の研究では、金沢、姫路、桑名⁸⁾などの研究でみられるように、地元に残る城下町絵図だけでなく、全国に残っている対象地域の城下町絵図を悉皆的に取り上げ、それらの関係を検討した上で、分析する必要がある。特に、城下町絵図があまり残っていない淀のような城下町では、こうした手法が欠かせないといえる。本稿では、各藩が国絵図とともに、収集、所蔵した、全国各地の城下町絵図について注目することとする。こうした絵図の書誌学的な考察を行うことは、城下町松江の絵図など、鳥根県関係の絵図を多く所蔵する本学附属図書館での研究、ひいては、近年盛んになりつつある山陰地方の絵図の研究の上でも、今後参考となると考えられる。

譜代大名の城下町に関する研究の課題については次のような指摘がある。まず、譜代藩城下町である播磨国姫路を対象に、姫路藩の城下町と商人についてまとめた、日本近世史が専門の三浦俊明によると、「譜代藩城下町に特徴があるとすれば町人地よりも、頻繁な転封にともなって必然化する家中の

屋敷割あるいは諸役屋敷の配置等の中に各大名の独自性を見いだすことができるのではないと思われる。だが残念ながら本書ではその点については未検討であり、今後の課題とせざるを得ない」⁹⁾とし、譜代大名の城下町では、武家屋敷の配置等に各大名の独自性が見出せるとしている。これは、同じく譜代大名の城下町である淀の特徴を検討する上でも重要な指摘である。

また、歴史地理学では近世の城下町が専門の渡辺理絵によると、今後の課題として、「頻繁な移封を経ている藩と一国支配を通した藩に関する武家地管理の差異をより具体的に明らかにすることである。(略) 譜代藩タイプにおいては家財をも含めて藩からの支給物として屋敷が受給されていた場合があるが、移封後の封地では徐々に外様藩と類似の屋敷利用が展開するのか、また封地での武家地管理は一貫性を有していたのかといった点は未検討である」¹⁰⁾としているのも重要であると考えられる。

こうした課題を明らかにするためには、まずは歴史地理学での基礎的な作業として、譜代大名の城下町絵図及びその関連資料を丹念に読み解き、譜代大名の城下町の特性を明らかにする必要がある。さらに、淀藩も同様であるが、譜代大名の城下町では、頻繁に藩主が転封していることから、一時代、一藩主の城下町絵図だけでなく、複数の時代にわたって通時的に城下町絵図を分析する必要がある。そうした作業によって、淀を含めた譜代大名の城下町における武家屋敷の特性について明らかにすることができると考えられる。

そこで、本稿では、絵図の解説、特に武家屋敷や、寺院・寺社など施設の分析、そして絵図と関連史料との照合といった、歴史地理学の基礎的な調査手法を踏まえ、山城国淀を対象に、城下町の拡大が行われる永井時代を中心として、畿内における譜代大名の城下町の特徴を捉えることを目的とする。なお、歴史地理学からみた、城下町淀の空間構造とその変容については、本学学生の乃木健太郎の論文で詳細に触れられている¹¹⁾ので、本稿では省略したい。

本稿の対象とする城下町淀は、元和9(1623)年伏見城の廃棄にともない、松平(久松)定綱が3万5000石で入封した【別表】。定綱は、宇治川対岸の川中島を自然の要害地として選り築城した。淀藩は伏見にかわる京都守衛の任務を第一としたが、寛永10(1633)年に定綱は美濃国大垣へ転封し、かわっ

て永井尚政が下総国古河の8万9100石余から淀へ10万石で入封した。この永井家以降、石川家、戸田家、松平（大給）家と経て、享保8（1723）年に稲葉家が10万2000石で入封し、廃藩まで続いた¹²⁾。淀藩の領主となった大名家は、最初の久松松平家（親藩）のほかは永井家以降いずれも譜代大名であるので、このことから譜代大名の城下町を検討する上で、城下町淀は対象地域として適切であるといえる。

本稿では特に、永井尚政（天正15（1587）年～寛文8（1668）年）の藩主時代に注目する。尚政は徳川家康に仕えて、関ヶ原の戦いや大坂の陣で軍功をたて、3代将軍家光にも信任されてその相談役の地位にあった。寛永10（1633）年、下総国古河から山城国淀に転封すると、京都所司代を補佐して、家光政権による畿内近国支配を後見した。寛永10（1633）年の木津川流路つけ替えによる城下の整備、拡大事業をすすめて淀藩の基礎を固めたほか、宇治の興聖寺の再建や禁裏造営にも尽力した¹³⁾とされ、こうした尚政による政策が、城下町淀の発展と大きく関係していると予想される。

注

- 1) 寅-65は、函号寅、番号65を指す。以下同じ。
- 2) 「淀城大絵図」は、絵図に記載される武家屋敷の人物名から、寛文9（1669）年永井尚征（7万3600石）の丹後国宮津藩に移封後、伊勢国亀山から6万石で淀へ入る、石川憲之時代の絵図である可能性が高いと考えられる。詳細は後述する。
- 3) 境幸政・荻原信一（1966）：『城と陣屋3 山城淀城』、日本城郭協会近畿支部研究会。
- 4) 阿部宏（1968）：淀城と「山城淀御府内図」について、大阪市立博物館研究紀要1、pp.61-63。なお、この論文に取り上げられている国立公文書館所蔵の「淀城図」（江戸末期）は、「日本分国絵図」所収で、美濃国岩村藩旧蔵の絵図であるが、調査の結果、「淀城大絵図」と同系統の絵図であることが判明した。
- 5) ①小林大祐（1988）：近世淀城下町の成立とその変容－近代淀川河川改修工事資料を用いた復元的考察－、日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系28、pp.865-868。②小林大祐（1994）：近世淀城下町、西川幸治編（1994）：『淀の歴史と文化』、淀観光協会、pp.47-55。
- 6) 矢守一彦・今井修平校注（1975）：山城淀下津町記録、原田伴彦編集代表『日本都市生活史料集成4 城下町篇2』、学習研究社、pp.371-416。
- 7) 前掲6）「解題」、p.20。

- 8) ①金沢城研究調査室 (2012) : 金沢城全域絵図目録、金沢城研究創刊号、pp.42-45。②金沢城研究調査室 (2014) : 金沢城全域絵図の分類と編年、金沢城研究 2、pp.18-57。③姫路市立城郭研究室編 (2014) : 『姫路城絵図集』、姫路市立城郭研究室 (姫路市立城郭研究室編 (1998) 『姫路城絵図展 : 世界遺産登録 5 周年記念』を改訂したもの)。④桑名市博物館編 (2016) : 『徳川四天王の城 - 桑名城絵図展 -』、桑名市博物館。
- 9) 三浦俊明 (1997) : 『譜代藩城下町姫路の研究』、清文堂出版、p.7。
- 10) 渡辺理絵 (2008) : 『近世武家地の住民と屋敷管理』、大阪大学出版会、p.185。
- 11) 乃木健太郎 (2018) : 城下町淀における空間構造とその変容、島根大学法文学部社会文化学科地理学研究室編 『2017年度 京都府実習報告書』、島根大学法文学部社会文化学科地理学研究室、pp.61- 74。
- 12) 佐和隆研ほか編 (1984) : 『京都大事典 正編』、淡交社、p.966。
- 13) 前掲12) p.680。

2. 西尾市岩瀬文庫所蔵「淀惣絵図」について

2.1 絵図の印記・識語及び表題

印記、識語をみると、旧蔵者、すなわち、絵図の伝来過程を検討することができる。「淀惣絵図」では、絵図の左下側 (=北西端、「本丸」の文字の向きによる) に、「桃木書院蔵」、「竹中氏図書記」、「平尚功印」の印記、「坂口蔵」の識語がある【写真1】。なお、絵図の表紙には、「岩瀬文庫」、「桃木書院蔵」の印記がある【写真2】。

このうち、「坂口蔵」、「平尚功印」は不明である。管見の限り、「坂口蔵」



写真1 「淀惣絵図」の印記、識語
(西尾市岩瀬文庫所蔵)

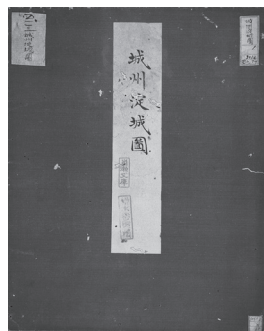


写真2 「淀惣絵図」の表紙
(西尾市岩瀬文庫所蔵)

とある絵図はこのほか3点見つかった。1点目は、国立国会図書館の古典籍資料室所蔵の和装本「宇治河沿岸図」に「坂口蔵」と墨書があり、このほか「淀惣絵図」にもみられる、「竹中氏図書記」の印記がある¹⁴⁾。2点目は、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の「奥州福島城下大火之図」¹⁵⁾で「坂口蔵」と墨記がある¹⁶⁾。狩野文庫は、明治の思想家・教育者として有名な狩野亨吉(1865～1942)の108,000点に及ぶ旧蔵書で、哲学をはじめ美術、兵学などあらゆる分野に及ぶ「古典の百科、江戸学の宝庫」として世界的にも知られた資料群である¹⁷⁾。3点目は、同じく東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の「勢州桑名之図」で、その写真が、桑名市博物館の展示図録『徳川四天王の城－桑名城絵図展－』に収録されている¹⁸⁾。絵図の左下側(＝東側、「本丸」の文字の向きによる)に「坂口蔵」と記されていることが確認できる。このうち写真が確認できる、3点の絵図にある「坂口蔵」の文字を比較すると、同筆である可能性が高いと考えられる。しかしながら、4点の絵図の内容を比較すると、「淀惣絵図」と「勢州桑名之図」は城下町絵図、「宇治河沿岸図」は宇治川の絵図、「奥州福島城下大火之図」は、城下町の大火の絵図であり、4点とも絵図の範疇にあったとしても、城下町絵図は除いて、それぞれ絵図の作成目的が異なることから、後で述べる「竹中氏図書記」と同様に、「坂口蔵」の坂口は、絵図などの収集家であった可能性がある。

「平尚功印」の印記であるが、これも不明である¹⁹⁾。西尾市岩瀬文庫では、他に「平尚功印」の印記のある資料として、「山城国図」(寅-64)がある²⁰⁾。「山城国図」にも「桃木書院蔵」と「竹中氏図書記」の印記、そして「坂口蔵」の墨記があるので、「淀惣絵図」と「山城国図」とは同一ルートで岩瀬文庫に入ってきた可能性がある。

次は、「竹中氏図書記」の印記である。これは竹中邦香所蔵本と考えられる。竹中邦香(天保5(1834)年～明治29(1896)年)は、加賀藩士から、明治になり司法官となり、これを辞してのちは、法律、地誌、漁業関係の専門書などを執筆した。そして明治12(1879)年国文社社長に就任した。竹中邦香は『野史』をはじめとする歴史書や法律書など、漢文で書かれた書籍を多く刊行したとされる。西尾市岩瀬文庫には、「淀惣絵図」、「山城国図」のほか、「東見記」(128-89)、「日光山起原沿革略記」(83-20)、「南亭余韻」(8-41)、「六鯨図」(卯-30)の計6点所蔵がある。「淀惣絵図」、「山城国図」のほかは、いずれ

も絵図以外の史料となっている。

最後は、「桃木書院」の印記である。桃木書院とは、神戸市在住の桃木武平(安政5(1858)～昭和4(1929))が、明治35(1902)年神戸で最初に開設した、私設図書館「桃木書院図書館」のことである。西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」によると²¹⁾、桃木武平は神戸の素封家で、兵庫北浜で造船・海運業を営む大松家を嗣ぎ、神戸市議員を務めた。明治35(1902)年1月、神戸生田町2丁目の自邸内に桃木書院図書館を蔵書数約2万5000冊で開設した。明治43(1910)年4月、東出町3丁目に移転したが、図書館活動は休止した。蔵書の一部と備品は明治44(1911)年11月に開館された神戸市立図書館に引き継がれ、古写本古版本は京都帝国大学に寄託された。昭和4(1929)年3月、京都帝国大学寄託資料540部、4879冊は、神戸の古書店白雲堂の手を経て、旧台北帝国大学に購入され²²⁾、桃木も台北に移住、間もなく死去したとされる。台北帝国大学は戦後国立台湾大学となり、現在「桃木文庫」として同図書館の貴重図書となっている。したがって、「桃木書院蔵」と印記のあるものは、桃木書院図書館の蔵書のうち、神戸市立図書館や国立台湾大学の所蔵とならなかったものである。西尾市岩瀬文庫には、「淀惣絵図」、「山城国図」を含めて、44点存在する。その多くは地理や地誌関係の和書、そして地理関係の一枚物の絵図が多い。

ところで岩瀬文庫は明治41(1908)年に西尾市の実業家、岩瀬弥助が開設した私立図書館として誕生した。西尾市岩瀬文庫学芸員の林知左子氏のご教示によると、岩瀬文庫の『図書原帳』によれば、「淀惣絵図」は大正5(1916)年1月2日に登録されたという。したがって、明治44(1911)年の桃木書院閉館から数年後に岩瀬文庫が購入したこととなる。また、「淀惣絵図」と「山城国図」は、印記から竹中邦香所蔵本→桃木書院図書館→岩瀬文庫というルートで、西尾市岩瀬文庫に入ったと考えられる。

次に、「淀惣絵図」の表題について検討する。西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」の解説によると、書名の備考として、「書名は内題による(右下に縦書)。後補書題簽「城州淀城図」(中央無辺)。旧書名「淀城之図」²³⁾と記している。

昭和11(1936)年発行の『岩瀬文庫図書目録』には、第七門兵事、一、総記及雑書に「淀城之図」(家中屋敷付)²⁴⁾とあるが、この表題(=旧書名)は

「後補書題簽（中央無辺）」にある「城州淀城図」【写真2】を採用したと考えられる。なお、この題簽には、「岩瀬文庫」と「桃木書院蔵」の印記があることから、この題簽は旧蔵者である「桃木書院図書館」もしくはそれ以前に貼ったと考えられる。また、表紙の右上には「城州淀城図 1 3052 図 5 59」、表紙の左上には、「四、一一三 城州淀城図」と記したラベルが貼られている【写真2】。前出の林知左子氏によると、右上の赤い枠のラベルは、全てではないものの、桃木書院旧蔵本に貼られていることから、桃木書院図書館の図書分類ラベルと推測されるという。また、左上のラベルも桃木書院旧蔵の城絵図や合戦図などにみられるが、桃木書院のラベルが2種類もあるのは不合理なので、それ以前の所蔵者、あるいは絵図の製作者か筆写者のラベルではないかと考えられるとのことであった。詳細は不明であるので、今後の課題としたい。いずれにしても、この淀の城下町絵図は、「平尚功」、「坂口」、「竹中氏」、「桃木書院図書館」など多くの所蔵者を経て、現在の西尾市岩瀬文庫に所蔵されていることが確認できた。

現在の書名が「淀惣絵図」とあるのは、内題に「淀惣絵図」とあること以外に、淀の城下町が「池上町・下津町・新町の城内町と納所町・水垂町・大下津町の城外町からなり、淀六郷・淀六町とも呼んだ」²⁵⁾とあるように、この「淀惣絵図」には、城内町と城外町の両方、すなわち、淀六郷全体が描かれていることから、西尾市岩瀬文庫がこの絵図の表題を「淀惣絵図」としたのは妥当といえる。

さらに、西尾市岩瀬文庫所蔵の「淀惣絵図」と同系統の絵図を確認することができた。これは、大山崎町歴史資料館発行の図録²⁶⁾に収録されている²⁷⁾。所蔵は京都府立総合資料館（現在、京都府立京都学・歴彩館）である。この図録の解説によると、「10 淀総絵図 『当進軒文庫旧蔵絵図』17世紀頃 城内に住む家老に「永井権右衛門」なる人物が記されており、寛永10年（1633）永井尚政が10万石で入部して以降の絵図と推定される。寛永14年の木津川川違以後の様子を示し、旧河道は埋め立てられ、高嶋の武家屋敷地や新町の町人地が新たに完成している。ただ、高嶋の西先端は宅地化が進んでいない。宇治川北縁の港町納所や淀姫大明神の社家町水垂の景観もよく表す」と記している。

この「当進軒文庫旧蔵絵図」については、京都府立総合資料館ホームペー

ジの古文書解題によると、「16世紀後半から幕末期にかけての模写による絵図、99点。合戦（城攻）図29点、陣列（座備）図22点、古城図14点などのほか、国絵図や屋敷絵図などである。京都に関するものとしては、「淀総絵図」「淀城本丸絵図」「桂離宮絵図」「京都府下之図」「瀬田川之図」などがある」²⁸⁾とする。管見の限り、「当進軒文庫」の印記のある和書としては、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵、伊勢貞丈著の『雑説問答』²⁹⁾ (3-5857-1)³⁰⁾と、京都大学附属図書館谷村文庫所蔵の長尾謙信評注の『新田義貞軍記』(5-08/ニ/1)の2点が確認できる。このうち前者は、「天明八年中原常政多賀氏本ヨリ寫」³¹⁾とあるように、天明8（1788）年の写し、後者は「江戸末期写」³²⁾としているので、「当進軒文庫」では江戸時代後期の写本を所蔵していたことが分かる。残存している史料数が少ないので、現段階では断定はできないが、京都府立京都学・歴彩館では「当進軒文庫旧蔵絵図」と称していることから、当進軒文庫旧蔵史料のうち、絵図のみが京都府立京都学・歴彩館に入っている可能性がある。また現段階では、西尾市岩瀬文庫と当進軒文庫旧蔵絵図とどちらが原本に近いかは断定できない。いずれにしても、家臣名まで記した、詳細な城下町絵図が筆写され、個人や図書館に引き継がれていたことが確認できる。

注

- 14) 未見。国立国会図書館サーチの書誌データによる。<http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000007313947-00>（2018年1月8日最終閲覧）
- 15) 絵図の写真、解説は、次の文献で確認することができる。鈴木啓（2006）：奥州福島城下大火之図、予防時報225（日本損害保険協会）、巻頭ページ。写真によると、絵図の左側（＝西側）に「坂口蔵」と墨書がなされている。
- 16) 図書館関係者のブログであると考えられる、個人ブログ「ブログじゃないブログ 公開ノート」の2016-03-06「狩野文庫の蔵書印（その10）」によると、「3-5782-1坂口蔵ノ墨記アリ」とある。<http://no-blog.hatenablog.com/entry/2016/03/06/204700>（2018年1月5日最終閲覧） 東北大学附属図書館ホームページの「狩野文庫データベース」によると、3-5782-1は「奥州福島城下大火之図」を指す。http://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398kano（2018年1月8日最終閲覧） 『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書 上』によると、目録には印記は記載されていない。今後の調査の進展を期待したい。東北大学附属図書館編（1976）：『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書 上』、東北大学附属図書館、p.773。

- 17) 東北大学附属図書館ホームページの「狩野文庫データベース」による。
http://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398kano (2018年1月5日最終閲覧)。
- 18) 前掲8) ④, p.17。なお、解説 (pp.112-113) によれば、寛永13 (1636) 年から正保2 (1645) 年の間の景観を描いたとされる。写真を見ると、絵図の左下側(東側) (「本丸」の文字の向きによる) にある注記、「勢州桑名之圖」と「坂口蔵」も同筆である可能性がある。
- 19) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵「勢州桑名之図」には「坂口蔵」の墨書とともに、「尚功之印」の印記があるが、詳細は不明である。現物の調査を含めて、今後の課題としたい。また「尚」は大名永井家の系統の名前でよく使用する漢字であり、先祖は恒武平氏の一流である良兼流をくむ長田氏であるので、永井氏の一族に「尚功」という名前の人物がいないかどうか、『寛政重修諸家譜』を確認したが、大名永井家の系統で該当人物は確認できなかった。この点も今後の課題としたい。
- 20) 西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「山城国図」の解説による。
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧) 解説によると、「衆星堂の古書販売目録 (『清興』13号、2013年) に本図と類似する山城国絵図があり (以下、別図と称す)、右下に「山城国高都合并郡色分目録」(石高数一覧) あり、末に「元禄十三庚辰年十二月 石川主殿頭」とある。その石高は本図とほぼ一致するが、葛野郡のみ3万5224石1斗1升8合8勺となっており (元禄郷帳に同じ)、岩瀬本の3万1214石4斗1合8勺と異なる。これは岩瀬本の誤記か。また、綴喜郡の石高は、別図・岩瀬本とも3万107石6斗5升3合6勺であるが、元禄郷帳は3万207石余。これは元禄郷帳の誤記か。一方、村数は岩瀬本と元禄郷帳はほぼ一致するが (相楽郡の村数を岩瀬本は52村とするが、元禄郷帳にある92村の誤記)、別図の村数はそれよりも多い (山城の全村数は岩瀬本では459村、別図では510村)」としている。このうち、古書販売目録にある山城国絵図 (別図) には「元禄十三庚辰年十二月 石川主殿頭」とあり、石高や村数の記載が、国立公文書館所蔵の元禄山城国絵図と一致することから、別図は、元禄13 (1700) 年幕府の命により淀藩主石川憲之が作成した元禄山城国絵図の写しである。したがって、各郡の石高や村数などに異なる点があるものの、岩瀬文庫所蔵の「山城国図」は、元禄山城国絵図の写しの可能性が高いといえる。
- 21) 西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「安芸備後産物絵図」の解説による。
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧) 西尾市岩瀬文庫学芸員の林知左子氏にご教示頂いた。
- 22) 鳥居フミ子によれば、国立台湾大学図書館の記録には、「桃木文庫 540部 4879冊 本邦古典ノ蒐集ニシテ古写本古版本多ク、殊ニ日本書紀ノ写本、異版ノ珍本多シ、桃木武平翁ノ旧蔵ニシテ曾テ京都帝国大学ニ依託保管シアリシモ

- ノ」と記されているとある。鳥居フミ子 (1995):『近世芸能の発掘』、勉誠社、p.76。
- 23) 西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「淀惣絵図」の解説による。
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧)
- 24) 財団法人岩瀬文庫 (1936):『岩瀬文庫図書目録』、財団法人岩瀬文庫、p.456。
- 25) 前掲12) p.964。
- 26) 大山崎町歴史資料館編 (2000):『第八回企画展 はるかなる淀川－三川合流の歴史－』、大山崎町歴史資料館、p.5。
- 27) 絵図の下側 (西側) (「本丸」の文字の向きによる) には、「老峯」と書かれた紙が貼ってあるが、詳細は不明である。
- 28) 京都府立総合資料館ホームページの「古文書解題」による。<http://www.pref.kyoto.jp/kaidai/kaidai-to.html> (2018年1月5日最終閲覧)
- 29) 国文学研究資料館ホームページの蔵書印データベースによる。http://dbrec.nijl.ac.jp/CSDB_40580 (2018年1月5日最終閲覧)
- 30) 『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書 上巻』、によると、目録には印記は記載されていない。今後の調査の進展を期待したい。前掲16) p.806。
- 31) 前掲16) 及び前掲17)。また「中原常政多賀氏」はいくつかのホームページで確認できるが、このうち、西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「事蹟合考」(152-120) の解説によると、書写識語に「時明和六乙丑 (1769) 年冬十二月十三日書写之既成／多賀氏中原常政誌」とあることから、18世紀後期の人物であることが分かる。さらに『武家儀礼格式の研究』によると、「江戸後期の故実家」と記している。①西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧) ②二木謙一 (2003):『武家儀礼格式の研究』、吉川弘文館、p.6,403,428。
- 32) 国文学研究資料館ホームページの日本古典籍総合目録書誌データベースによれば、『新田義貞軍記』は「江戸末期写」と記している。http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_4202602 (2018年1月5日最終閲覧)

2.2 絵図の景観の年代と記載内容

2.2.1 「城砦淀之城図」について

「淀惣絵図」について検討する前に、「城砦淀之城図」(明治大学図書館蔵 田文庫所蔵、62-115)【写真3】について、若干検討することとする。「城砦淀之城図」は、寛永14 (1637) 年の木津川筋の川違工事以前の松平定綱時代の景観を描いたとされるが、従来の研究では検討されておらず、また「淀惣絵図」と比較する上で重要な絵図であるからである。

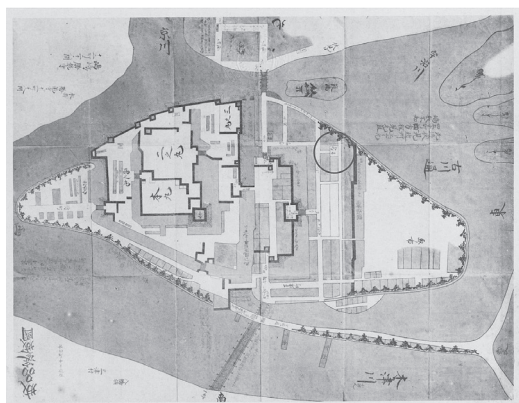


写真3 「城淀之城図」
 (『漢城温故会第九回報告』所収、口絵も参照)

「城淀之城図」の写真は、昭和9（1934）年の漢城温故会編『漢城温故会第九回報告』の巻頭に掲載されている。この絵図の解説を淀藩主稲葉家の家老田辺権太郎家子孫である田邊密蔵が書いている。田邊によると、「(井上)先生御帰京後御消息あり、頃日芦田伊人君の話に、同君所蔵に淀の古地図ありとの事なり、就いて借覧を乞ふべしとありしにより、直に同君に懇請せしに快諾ありて送りくれられしが第二の地図なり、まことに初めて見る淀の古図にして、之によりて我淀の古き姿を見ることを得たり。実に(井上)先生のご厚恩、芦田氏の御厚情謝するに言なき次第なり、今此図を見るに、木津川域の南を流れて、南の堀となり、今の富田町、新町、番町、木津、川顔、など凡て木津川流域に所属せり、この木津川を南に押出し、今の木津、川顔と美豆との間を流れしめしは、鈴江武雄氏所蔵の淀城秘鑑といへる写本に、淀城下由緒大概集書写と題するものありて、之れに「一、大橋川違寛永十四年十五両年に有之、一、新町家建初寛永十五年戊寅年より」と見えれば、寛永十四年の事なり（淀城は元和九年松平越中守定綱侯によりて築造せられ、寛永十年永井信濃守尚政侯代りて城主となられし故、此の木津川の附替は寛永十四年に永井侯によりて行はれしなり）、されば此図は寛永十四年以前恐らくは永井侯家臣の手によりて写され、其原図は築城後間もなく作製せられたるものなるべし、今寛永十四年のものとしても築城後僅に十五年なれば、淀町最古の図といふべく、実に貴重すべきものなり（現時の淀城は築

城によりて初めて世に出るものなれば)」³³⁾とある。

すなわち、この絵図は、寛永14（1637）年の木津川違以前の景観を記し、永井家の家臣により筆写されたもので、原図は、元和9（1623）年の松平定綱の築城まもない頃に作製されたとしている。江戸時代の城下町淀を研究する上で最も重要な史料の一つである、『山城淀下津町記録』所収で、元禄・宝永・正徳年間（1688～1716）の大小の事件をまとめた、「元禄年間淀下津町古記録之写」によると、光明寺は寛永8（1631）年中興開基とされている³⁴⁾。この絵図には光明寺が記されている【写真3】ので、この絵図は築城直後ではなく、寛永8（1631）年以降、寛永14（1637）年以前の景観を描いていると考えられる³⁵⁾。

注

33) 田邊密蔵（1934）：巻頭に掲げし式葉の地図に就て、漢城温故会編『漢城温故会第九回報告』、pp.47-51（国立国会図書館デジタルコレクションによる）。なお、本文にある「芦田伊人君」は、明治大学図書館蘆田文庫の旧蔵者である。蘆田文庫は、芦田伊人氏が長年収集した蔵書のうち古地図類を、昭和32（1957）年明治大学が購入したものである。

34) 前掲6）p.384。

35) 博搜したわけではないが、管見の限り、「城砦淀之城図」と同様に、寛永14（1637）年以前の景観を描いた淀城下町の絵図は以下の通りである（関東地区など主要図書館での調査は未調査である。今後の課題としたい）。岡山藩（池田家）、尾張藩（尾張徳川家）、加賀藩（前田家）、熊本藩（細川家）といった藩が全国各地の城下町絵図を収集していたこと、前田家、細川家の絵図や軍学者山県大武編の『主図合結記』は軍学、兵学の観点から収集されたことが注目される。今後悉皆調査を実施すれば、寛永14（1637）年以前の絵図が他にも確認される可能性が高い。下記の絵図のうち、「城砦淀之城図」と同系統の絵図は「岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫『山城淀城図』（T3-252）」である。城郭内の配置、城下町での町割、堀割など基本的な記載がほぼ同じであるが、若干記載内容に違いがある。池田家文庫の方では、城郭地区の西に位置する西ノ丸の北側に、「御殿」や「舞台」など建物が記載されているが、蘆田文庫の方では記載がない。西ノ丸の西側の島崎には、双方とも「侍町」が記載されているが、池田家文庫の方では、島崎の北側の川沿いにも「足軽町」、「侍町」が記載されている。蘆田文庫では大橋の東側の木津川に「川除」が2ヶ所出ているが、池田家文庫の方にはない。城下町の東端の「魚ノ市」付近では、川沿いにある水車から、西方向に水路が伸びて「水道」と記しているが、蘆田文庫の方にはない。池田家文庫の方では、魚の市の北西の川沿いには、「二重櫓 嶋田勝榮軒居之、後嶋田弾正」

と記されているが、蘆田文庫の方にはない。この二重櫓、「嶋田勝榮軒」、「嶋田弾正」については不明である。このうち、嶋田弾正については、『寛政重修諸家譜』巻289に、旗本（5000石）で、慶長18（1613）年江戸の町奉行となる島田利正が、寛永2（1625）年「弾正忠」となったと出ているが、絵図に出てくる人物に該当するかは不明である。『寛政重修諸家譜』巻289嶋田、高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問（1964）：『新訂寛政重修諸家譜 第五』、続群書類従完成会、p.194。したがって、蘆田文庫の絵図と池田家文庫絵図との記載内容の違いを分析すれば、描かれた景観の年代を確定することができると考えられる。詳細は今後の課題としたい。

- (a) 岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫「山城淀城之図」（T3-251）、「岡山大学池田家文庫絵図公開データベースシステム」による。
- (b) 岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫「山城淀城図」（T3-252）同上。
- (c) 名古屋市蓬左文庫所蔵「山城国淀城図」（図235）。
- (d) 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵津田文庫、有沢永貞編写、元禄5（1692）年、『諸国居城之図集』所収「城州淀城図」（特098.6-66）、金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵文書データベースによる。
- (e) 尊経閣文庫所蔵『諸国居城図』所収「山城国淀城図」、宝永8（1711）年頃、前田育徳会尊経閣文庫編（2000）：『尊経閣文庫蔵 諸国居城図』、新人物往来社、p.10。
- (f) 永青文庫所蔵「山城国淀之城之絵図」、寛永11（1634）年頃、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編（2013）：『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編2』、吉川弘文館、p.12。
- (g) 山県大式編『主図合結記』、明和初年頃成立、大類伸（1968）：『日本城郭史料集』、人物往来社、p.496。

2.2.2 新造成地の形成

「淀惣絵図」では第一に、城下町の南側に新たな造成地、新町と高嶋と木津長屋が形成されていることが挙げられる。「城砦淀之城図」【写真3】と比較すると、その違いは明瞭で、新造成地の形成の状況が確認できる【写真4】。「城砦淀之城図」にみられる、木津川及び木津川にかかる大橋（＝淀大橋）は、「淀惣絵図」では、南側に大きく移動したことが分かる。「城砦淀之城図」にみられる大橋の東側に新たに造成されたのが「新町」で、町家、御鷹部屋、淀屋屋敷が形成された。そして大橋の西側には「高嶋」が新たに造成され、「番町」と呼ばれる中級武士の武家屋敷地区ができた。さらに木津川沿いには、足軽屋敷である木津長屋が形成された。



写真4 「淀惣絵図」(全体)
(西尾市岩瀬文庫所蔵、口絵も参照)

「元禄年間淀下津町古記録之写」によると、「寛永十四丑ノ年、同十五寅年に木津川川違被成候」³⁶⁾とある。城下町の拡大と水害防除のために、寛永14(1637)年、淀で合流する木津川の付替工事が着工され、翌年寛永15(1638)年竣工されたとする。また、同じ「元禄年間淀下津町古記録之写」によると、「新町家立寛永十五年寅より元禄十丑迄五十九年に成る」³⁷⁾とあり、新町で家が建ち始めたのは、付替工事が完了した、寛永15(1638)年であったことが確認できる。したがって、この絵図の景観の年代は、寛永15(1638)年以降と考えられる。

また、『久御山町史 第1巻』によると、藩主尚政が「淀城を水難から守るために木津川の流路替えを行い、併せて城下町を拡幅した」のは、淀だけで

なく、中央においても「寛永十四年江戸城本丸普請・正保四年（一六四七）増上寺御霊屋普請・承応三年（一六五四）禁裏造営奉行など」、「卓越した土木技術を駆使している」³⁸⁾とする。このことは淀での尚政の藩政を考える際にも重要であると考えられる。

注

36) 前掲6) pp.383-384。

37) 前掲6) p.381。

38) 久御山町史編さん委員会編（1986）：『久御山町史 第1巻』、久御山町、p.454。

2.2.3 淀大橋、孫橋の架橋

第二に、「淀惣絵図」では、宇治川及び巨椋池に架かる淀小橋、改修後の木津川に架かる淀大橋、新町と木津長屋を結ぶ孫橋が記されている【写真4】ことが挙げられる。

『山城淀下津町記録』所収で、天保6（1835）年頃成立とされる「淀之由縁」によると、「今の大橋間小橋は寛永十六卯とし出来せし也」³⁹⁾とあり、木津川に架かる「大橋」（＝淀大橋）と、新町と木津長屋を結ぶ「間小橋」（＝まごばし、孫橋）は、寛永16（1639）年にできたと記している。

また、国立公文書館所蔵「譜牒餘録 卷第五十」の（右近太夫嫡男 永井信濃守大江尚政）によれば、「一、同（寛永十五）年淀川瀬違之義言上仕、元川を埋立、侍屋敷ニ自分取立申候、右瀬違ニ付、大橋かけ直り申候故、信濃守より下奉行之もの出し相務申候事」⁴⁰⁾とあり、尚政は寛永15（1638）年の淀川（＝木津川）の瀬違の件を申し上げて、元の川を埋め立て、自分で侍屋敷に取り立てた。また、この瀬違に付いて、大橋（＝淀大橋）を掛け直すので、尚政より下奉行の者を出したとある。したがって、この絵図の景観の年代は、淀大橋と孫橋が架かった、寛永16（1639）年以降と考えられる。

注

39) 前掲6) p.398。

40) 国立公文書館所蔵「譜牒餘録 卷第五十」、国立公文書館内閣文庫編（1974）：『内閣文庫影印叢刊 譜牒餘録 中』、国立公文書館内閣文庫、p.599。

2.2.4 家老の記載

第三に、この絵図には、本丸東側の「東大手」に「永井権右衛門」、「佐川田喜六」が記されている【写真5】ことが挙げられる。いずれも永井時代の家老である。このうち、永井権右衛門は、『寛政重修諸家譜』によると、尚政の子（八男）で、^{なおゆき}長男尚征の弟に、「尚盛 萬五郎 権左衛門 母は某氏家臣となる」^[41]とあるので、正しくは永井権左衛門である可能性が高い。『濃州加納城主永井肥前守家記録』^[42]によると、「延宝三乙卯年八月十日 慧光院様 丹後宮津観音寺 永井権左衛門尚堂公」とある。すなわち、永井権左衛門は、延宝3（1675）年8月10日に亡くなり、寺は丹後国宮津の観音寺とある。永井家が淀から宮津に移封後に亡くなっていることが確認できる。『与謝郡誌 上巻』によると、観音寺は、「圓通山観音寺 城東村字惣の国永にあり。本尊釈迦三尊、もと聖観音を本尊とし、天文年中勅諡佛海慈雲禅師の創立なりといふも詳かならず。寛文年中永井尚征侯、城州淀より宮津へ移封の砌り、賜紫傳心禅師を同行し、翌年改造永井家の菩提所と定め、同師を開祖に仰ぎ、明和七年火災に罹り、安永三年六月再興、寺宝傳行基作聖観音像一軀、法道仙人作薬師像一軀あり」^[43]とある。永井権左衛門の寺が宮津の観音寺であるのは、永井氏が宮津移封とともに、観音寺を永井家の菩提寺と定めたことによることが確認できる。

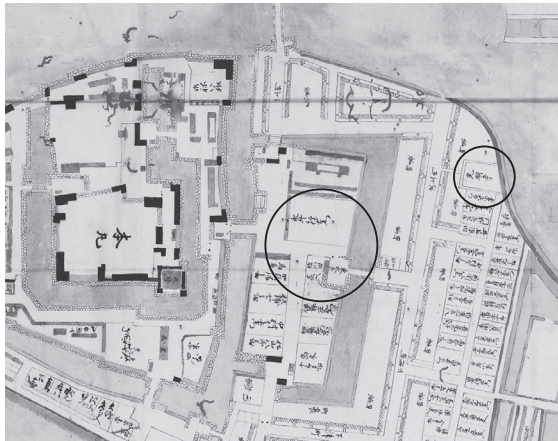


写真5 「淀惣絵図」（東大手付近）
（西尾市岩瀬文庫所蔵）

『寛政重修諸家譜』によると、寛永10（1633）年3月25日、尚政が下総国古河から移封し、明暦4（1658）年2月28日尚政が隠居すると、長男尚征が家督を継ぎ、寛文9（1669）年2月25日尚征は丹後国宮津へ移封した⁴⁴⁾。したがって、この絵図の景観は、寛永10（1633）年から寛文9（1669）年までの永井時代のものと考えられる。

注

- 41) 『寛政重修諸家譜』巻619永井、高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問（1965）：『新訂寛政重修諸家譜 第十』、続群書類従完成会、p.274。
- 42) 岐阜県図書館所蔵。
- 43) 京都府与謝郡編（1923）：『与謝郡誌 上巻』、京都府与謝郡、pp.204-205。
- 44) 『寛政重修諸家譜』巻619永井、前掲41) pp.270-273。

2.2.5 寺院の記載

第四に、城下町の寺院の記載が挙げられる。「淀惣絵図」には、城下町の南、寛永14（1637）、15（1638）年の木津川の川違によって、新たに生まれた新町の一画に「東雲寺」、「長円寺」、「高福寺」が並んで建っていることが確認できる【写真6】。同じく永井時代の景観を描いたとされる、京都大学

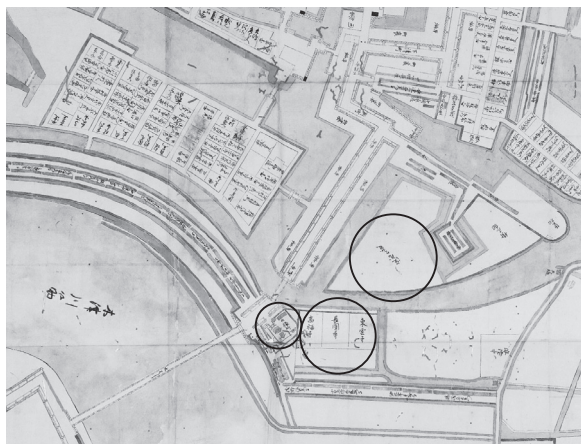


写真6 「淀惣絵図」（新町周辺）
（西尾市岩瀬文庫所蔵）

建築系図書室所蔵の「淀城大絵図」にもこの3ヶ寺が「淀惣絵図」と同じ場所に記載されており、東雲寺は禅宗、長円寺と高福寺は浄土宗と記している【写真7】。『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」には、これらの寺院の由緒が出ている⁴⁵⁾。その史料は、元禄9（1696）年5月に浄土宗本山の知恩院へ提出した、淀四ヶ寺（常念寺⁴⁶⁾、長円寺、高福寺、光明寺）の開山由緒書の控である。このうち高福寺については、「山城国久世郡淀徳光山知相院高福寺は弥陀次郎遺跡也、昔中絶而開山之事は不知、中興開基百一年以前慶長元丙申年心蓮社善誉上人也、其遷化は同十八癸丑三月朔日也」とあり、開山のことは不明であるが、中興開基は、慶長元（1596）年善誉上人によるもので、善誉上人は慶長18（1613）年に亡くなったとしている。長円寺については、「一、山城国久世郡淀寿豊山長円寺は古跡なり、開山之事は不知、中興開基は九十九年以前慶長三戊戌年寂蓮社光誉上人也、其遷化は元和九癸亥年八月廿一日也」とあり、長円寺は古跡で、開山のことは不明であるが、中興開基は、慶長3（1598）年光誉上人によるもので、光誉上人は元和9（1623）年に亡くなったとしている。すなわち、由緒書によると、長円寺と高福寺は、松平定綱が淀城の築城を命じられた、元和9（1623）以前に中興開基がなされ、淀に存在していたことが確認できる。

蛇足であるが、「淀惣絵図」において、池上町の東端に記されている光明

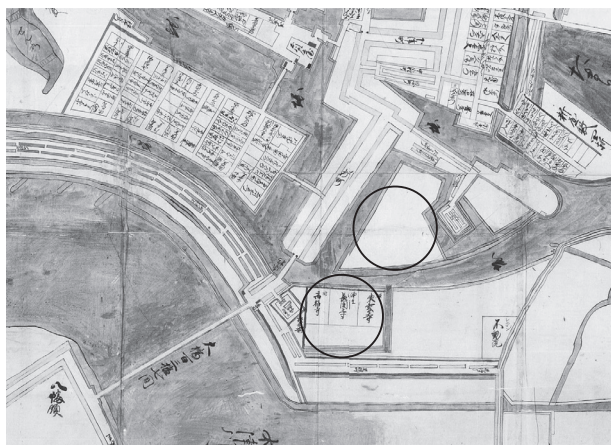


写真7 「淀城大絵図」(新町周辺)
(京都大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵)

寺【写真5】についてもみると、「山城国久世郡淀薬師院は山号なし、雖古跡中絶数年也、六拾六年以前寛永八辛未年相蓮社頓誉上人開基建立、生国は遠江国掛河也、(略)遷化は寛文二壬寅年六月廿日、行年七十四」とあり、古跡であるが、中絶して何年か経過している。(中興)開基は、寛永8(1631)年頓誉上人によるもので、頓誉上人の生まれは遠江国掛川⁴⁷⁾で、寛文2(1662)年に74歳で亡くなったとしている。なお、光明寺は、寛永14(1637)年の木津川筋の川違工事以前の景観を描いた「城笈淀之城図」(明治大学図書館蘆田文庫所蔵、62-115)には、「淀惣絵図」【写真5】と同様に、光明寺が池上町の東端に記されている【写真3】。光明寺の存在は寛永14(1637)年以前の絵図によって確認することができる。

また、『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」には、寺院の移動について次のような記載がある。

「一、昔高福寺は加藤新五右衛門殿屋敷之辺

一、長円寺は山崎孫之丞殿屋敷之辺

一、東雲寺は新儀左衛門殿屋敷之辺

右三ヶ寺は松平越中守様入部被成、其時分代官町の裏通りへ御引被成候、此処今池中に成、右三ヶ寺代官町にて明暦元巳年ノ年二月十八日に焼申候、元禄十丑年迄四十三年、明暦三年に新町寺地被為仰付、東西へ式拾間、南北へ廿七間半つ、被下、高福寺堂東西へ六間、南北五間、(略)右明暦三未年ノ年に立、元禄十年迄四十壹年に成る」⁴⁸⁾とある。

すなわち、高福寺の旧地は、現在の加藤新五右衛門の屋敷のあたり、長円寺は現在の山崎孫之丞の屋敷のあたり、東雲寺は現在の新儀左衛門の屋敷のあたりにあったとする。これらの屋敷は、石川時代の家臣を示しているが、詳細については後述する。また、この3ヶ寺は、松平(久松)定綱が淀藩主の時代、元和9(1623)年から寛永10(1633)年の間に、淀城の東側の町人地区にあたる池上町と下津町の東側に位置する、代官町の裏通りへ移動したとしている。後に、明暦元(1656)年⁴⁹⁾2月18日に焼失したので、寛永14(1637)年から寛永15(1638)年までの木津川筋川違工事によって、新たに造成された新町へ、明暦3(1657)年に移動したと記している。先に記したように、「淀惣絵図」では、この3ヶ寺は新町に並んで記されているので、この絵図の景観の年代は、寺院が新町へ移転したとされる、明暦3(1657)年以降となる。

注

45) 前掲6) pp.383-384。

46) 『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」によれば、常念寺は桂川の対岸の水垂町にあった。水垂町は、新町、下津町、池上町、納所町、大下津町とともに「淀六郷」を構成していた。

47) 寛永9（1632）年に光明寺を中興開基した、頓誉上人の生まれは遠江国掛川としていることは注目される。松平定綱は、元和9（1623）年淀へ入封する前には遠江国掛川藩主であった。掛川藩では3万石で、淀では5000石加増され、3万5000石となり、掛川時代より家中の人口が増加したと考えられる。また、一般的に、藩主の転封は、家臣の移動だけでなく、町人や寺院の移動を伴うことが多いため、光明寺の中興開基も、松平定綱の淀への入封と関係している可能性があるが、今後の課題としたい。

48) 前掲6) p.381。

49) 史料には、「明暦元巳年」、「明暦三未年」とあるが、干支をみると、明暦元（1655）年は乙未、明暦3（1657）年は丁酉であるので、和暦と十二支が合っていないこととなる。十二支を誤記したか、もしくは、十二支の方が正しいとすると「明暦元巳年」は癸巳の承応2（1653）年、「明暦三未年」は乙未の明暦元（1655）年の可能性がある。絵図の年代比定とは矛盾しないが、このズレについては今後の課題としたい。

2.2.6 御旅所の記載

第五に、淀・納所・水垂・大下津の産土神である淀大明神（現在與杼神社⁵⁰⁾）の「御旅所」の記載が挙げられる。淀大明神は、城下町北西の対岸に位置する水垂村にあり、「淀惣絵図」には「水垂明神」と記されている【写真8】。また「御旅所」は、新町にある高福寺の西側に描かれている【写真6】。『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」にある、元禄5年（1692）頃公儀へ提出された「大荒木森淀大明神御産所神社御改書上之事」によると、淀大明神の御旅所について、次のように記している。

「御旅所社二ヶ所

一、大下津御旅所境内 東西五間半 南北九間

一、新町御旅（所）境内 東西貳拾三間半 南北貳拾三余⁵¹⁾

つまり、御旅所は2ヶ所あり、1ヶ所は城下町の対岸にあたる大下津町、もう1ヶ所は城下町の新町にあったとしている。「淀惣絵図」では新町の御旅所のほか、対岸の大下津村の川沿いで、水垂明神の西側に、「御旅」の表

記とともに、旅所の建物の絵が書かれている【写真8】。先ほどの寺院の記載と同様に、「元禄年間淀下津町古記録之写」の記載と「淀惣絵図」の記載が一致していることが注目される。また、神輿の渡御の際に仮に安置する御旅所が淀川の両岸にあるということは、淀川の右岸にある神社と、淀川の左岸にある城下町との間を、神輿が船に乗せられ、淀川を渡っていたと考えられ、こうした神輿渡御の祭礼は城下町淀の象徴となっていたと予想される。

さらに、「元禄年間淀下津町古記録之写」には、御旅所の移転について記載がある。「一、新町へ御旅所引け申候は承応三年午ノ年、元禄十丑ノ年迄四拾四年に成る、新町へ不引け前は下津町大専寺南魚市大津土左衛門屋敷辺に有候」⁵²⁾とある。すなわち、淀大明神の「御旅所」は、下津町の大専寺南魚市の大津土左衛門の屋敷付近にあったが、承応3（1654）年に新町へ移動したとしている。したがって、この絵図の景観の年代は承応3（1654）年以降となる。なお、新町へ移動する前の御旅所の位置については後述する。



写真8 「淀惣絵図」（水垂・大下津周辺）
（西尾市岩瀬文庫所蔵）

注

50) 與杼神社の社殿は、桂川河川敷の拡幅工事により、明治34（1901）年7月移転工事の着工、翌年5月完成、同年6月神社のすべてが現在の淀城跡内に移転した。與杼神社公式ページによる。<http://www.yodojinja.com/yodojinja/>（2018

年1月5日最終閲覧)

51) 前掲6) pp.380-381。

52) 前掲6) p.381。

2.2.7 淀屋屋敷の記載

第六に、「淀屋々敷」(=淀屋屋敷)の記載が挙げられる。「淀惣絵図」では、城下町の南、寛永14(1637)、15(1638)年の木津川の川違によって、新たに生まれた新町の東側に記されている【写真6】。なお、淀屋屋敷の東側には「御鷹へや」(=御鷹部屋)が記されている。淀屋屋敷の南側には、新町の一画に移転してきた「東雲寺」、「高福寺」、「長円寺」が記されている。いずれも城下町の縁辺部に位置していることが分かる。絵図のため、正確な面積を計測することは難しいが、本学学生の乃木によると、GISによる計測によって、「淀屋々敷」の面積は、淀城本丸の面積より約1.6倍の面積であるという⁵³⁾。

同じく永井時代の景観を描いたとされる、京都大学建築系図書室所蔵の「淀城大絵図」には、「淀屋々敷」の文字が記載されていないが、「淀惣絵図」で「淀屋々敷」と記載された区画と同様の区画が記載されていること【写真7】から、「淀城大絵図」にも「淀屋々敷」があったとみてほぼ間違いないと考えられる。

さらに、管見の限り、「淀屋々敷」が記載されている淀の城下町絵図が他にも存在することが確認できた。

(a) 広島市立中央図書館所蔵、浅野文庫『諸国当城之図』所収「山城淀」、天和3(1683)～元禄5(1692)年頃の景観、宝暦13(1763)年～寛政11(1799)年頃成立：「淀やケ庵ヤシキ」⁵⁴⁾

(b) 名古屋市蓬左文庫所蔵「山城淀城図」(図234)⁵⁵⁾、享保元(1716)年写：「足屋ケ庵屋舗」【写真9】

(c) 松江歴史館所蔵『極秘諸国城図』所収「山城淀」、元禄5(1692)年：「濱屋ヶ庵屋敷」⁵⁶⁾

先に述べた加賀藩の絵図などと同様に、広島藩の浅野家や松江藩の松平家でも、淀の城下町絵図を収集していること、これらの絵図は軍学、兵学の観点から収集されたと考えられることが注目される。今後悉皆調査を実施すれば、同系統の絵図が他にも確認される可能性が高い。なお、名古屋市蓬左文

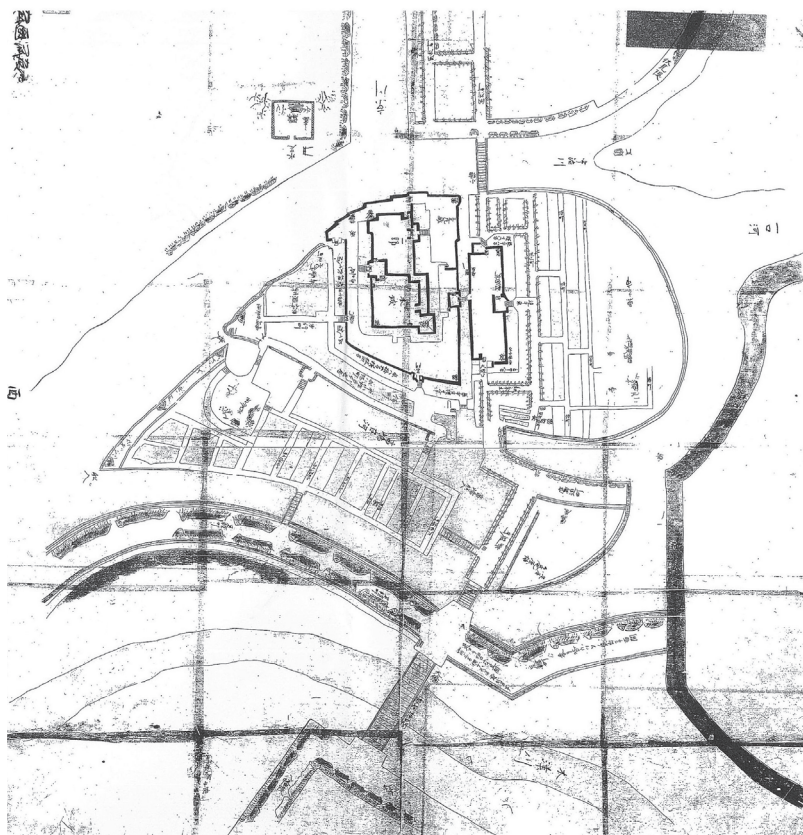


写真9 「山城淀城図」(名古屋市蓬左文庫所蔵)

庫所蔵絵図の「足屋」、松江歴史館所蔵絵図の「濱屋」はいずれも誤記である。

3点の絵図に共通して記されている「ケ庵」あるいは「个庵」は、元禄10(1697)年没の淀屋4代重当、もしくは享保2(1717)年没の淀屋5代広当を指すと考えられる。4代重当は右衛門太郎、後三郎右衛門、个庵とも名乗り、5代広当は三郎右衛門、个庵、辰五郎とも名乗った⁵⁷⁾とされる。

詳細は後述するが、2.2.5「寺院の記載」で述べた、明暦3(1657)年に移転した新町の「東雲寺」、「高福寺」、「長円寺」が、この3点の絵図ではいずれも新町に記載がない。したがって、3点の絵図は明暦3(1657)年以前の可能性がある。さらに2.2.6「御旅所の記載」で述べた、承応3(1654)年に

新町へ移転した御旅所も、この3点の絵図ではいずれも新町に記載がない。また、名古屋市蓬左文庫所蔵「山城淀城図」には、下津町に「明神旅所」の記載があり、また御旅所と鳥居の絵が描かれている【写真10】。松江歴史館

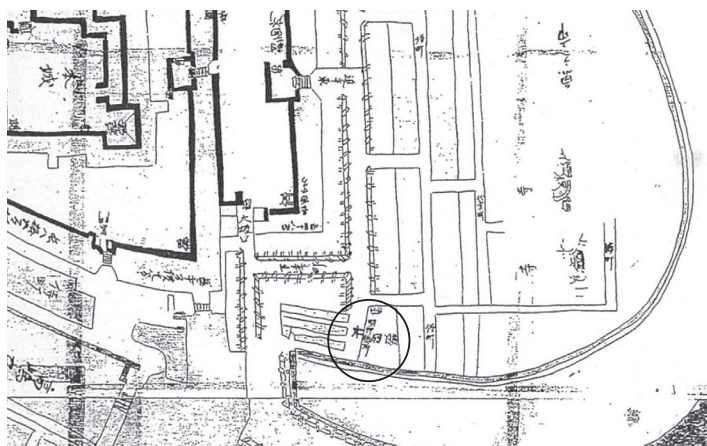


写真10 「山城淀城図」(下津町周辺)
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

所蔵『極秘諸国城図』所収「山城淀」では、「旅所」の文字は記載されていないものの、同じ場所に、御旅所と鳥居の絵が描かれている⁵⁸⁾。こうしたことから、3点の絵図は、承応3(1654)年以前の可能性がある。そうすると、絵図にある淀屋の「ケ庵」あるいは「个庵」は、享保2(1717)年没の淀屋5代広当ではなく、元禄10(1697)年没の淀屋4代重当の可能性が高い。

淀屋屋敷については、『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」にも記載がある。それには、「一、元禄六癸酉年新町淀屋ケ庵屋敷、殿様江被召、池嶋を御築、同十二月に弁才天御社御建立、翌戊ノ正月竹生嶋より弁才天御勧請、毎年正月十三日より同十九日迄御開帳、富在り、尤毎年上(旬)日十日之間操り芝居有之候、同八乙亥年十二月稻荷之御社御建立」⁵⁹⁾とある。元禄6(1693)年、淀藩主石川憲之の時代に、新町にあった「淀屋ケ庵屋敷」は、殿様である石川憲之へ召し上げられ、後に池島が築造され、12月には弁天社が建立された。翌年元禄7(1694)年正月には近江国の竹生島から弁才天が勧請され、毎年正月13日から19日までご開帳されたことなどが書かれている。

先に引用した、境幸政・萩原信一の『城と陣屋 3 山城淀城』では、「淀城付近の史跡」の一つとして、「淀屋辰五郎の別荘伝説地」を取り上げている。「江戸時代の豪商淀屋辰五郎の先祖は綴喜郡岡本庄の人だというのが、また淀の出身だという説もある。そういう関係で辰五郎は淀の城下に豪壮な別荘を営んでいたという。辰五郎の念じた弁才天像は今も新町天神社に祝われている。ほか、別荘地跡に建てられたという料亭（今では某会社の寮）もあった」⁶⁰⁾と記し、これまで淀での淀屋屋敷の存在は伝説であったが、絵図と史料を結びつけることによって、その存在を初めて明らかにすることができた。したがって、この絵図では新町に元禄6（1693）年に召し上げられた淀屋屋敷の記載があり、また新町の3ヶ寺が記載あることから、絵図の景観の年代は、明暦3（1657）年以降、元禄6（1693）年以前となる。

注

53) 前掲11) p.67。

54) 原田伴彦・矢守一彦編（1982）：『浅野文庫蔵 諸国当城之図』、新人物往来社、p.10。「諸国当城之図」は、旧広島藩主浅野家に伝えられた城絵図集で、東北から九州までの各地に当時現存した154城を描いた絵図である。このほか、浅野家には古城を描いた絵図177枚からなる、「諸国古城之図」も伝えられている。

55) 絵図の端裏には、「山城国淀城図」とある。

56) 松江市史関係者からの情報提供による。

57) ①物上敬（1943）：『日本商人伝 下巻』、佃書房、pp.87-164（淀屋常安）。②宮本又次（1957）：『大阪町人』（アテネ新書81）、弘文堂、pp.68-84（淀屋常安と个庵）。

58) 前掲56)。

59) 前掲6）p.381。

60) 前掲3）pp.11-12。

2.2.8 家臣の記載

第七に、永井家家臣の記載が挙げられる。永井家の淀藩時代の分限帳は、今のところ確認されていない。永井家は、明暦4（1658）年尚政の長男尚征が7万3600石で家督を継いだ後、寛文9（1669）年丹後国宮津へ転封となり、延宝2（1674）年尚征の三男尚長が家督を継いだ。延宝8（1680）年尚長が江戸の増上寺で、志摩国鳥羽藩主内藤忠勝に殺害されて所領は没収となった。その後、同年尚征の六男直圓なおみつが家名の再興を許され、大和国新庄で1万

石の大名となった。そうしたことから、分限帳だけでなく、淀藩時代の永井家家臣の家系図や由緒書も確認されていない。しかしながら、「淀惣絵図」に記載されている人物のなかで、具体的に家臣の由緒が分かる人物が存在することが分かった。本稿では由緒が判明した2人を取り上げる。

(1) 山本勘介

1人は、高嶋の番町の五番町に記されている「山本勘介」である【写真11】。「山本勘介」とは、戦国時代の武将で、『甲陽軍鑑』で武田信玄の軍師として活躍し、川中島の戦いで討死にしたと伝える伝説的人物であり、武田流兵法の祖とされる山本勘助（菅助）の子孫である。最近、山梨県立博物館関係者の調査により、沼津市在住の山本勘助（菅助）の子孫が山本勘助（菅助）関係の文書を所蔵していることが分かり、存在すら疑われていた山本勘助（菅助）とその子孫の存在や動向が初めて確認された。その成果は2013年出版の『「山本菅助」の実像を探る』で詳細にまとめられている⁶¹⁾。ここではその成果に基づきながら、淀との関係について述べることにしたい⁶²⁾。

山本勘助（菅助）の孫、平一が山本家を継ぎ、旗本として活躍していたが、慶長10(1605)年伏見在番の際に亡くなり、弟の三郎右衛門（文禄3（1594）年生）を含めて、親類は牢人となった。三郎右衛門は旗本になることを望んだが、うまくいかなかった。その後、寛永3（1626）～9（1632）年頃、水



写真11 「淀惣絵図」(高嶋周辺)
(西尾市岩瀬文庫所蔵)

戸藩主徳川頼房の意向により、水戸藩の仕官を勧められた。これは頼房が『甲陽軍鑑』を読み、そこに出てくる山本勘助（菅助）に惹かれ、子孫がいれば召し抱えたいと考えていたからである。しかしながら、寛永9（1632）年までにその話は頓挫してしまった。その後寛永10（1633）年、淀藩主永井尚政の強い希望により、尚政に仕官することになった。同年4月、尚政は転封で淀へ向かう折、甲州に立ち寄り、山本三郎右衛門と対面し、三郎右衛門を召し抱えることにした。同年8月に三郎右衛門は淀に到着し、主君尚政にお目見えし、足軽20人を預けられ、知行300石を拝領した。

三郎右衛門が淀へ向かう際の史料のなかに、城下町淀の状況が出ている。この時永井家家臣佐川田山三郎と三郎右衛門とのやりとりを示した史料によると、「山本を淀に呼ぶのは8月にしたいこと。家臣が滞在する家屋敷が不足しており、普請の途中であることや、寛永十年は淀に洪水被害があり、その影響を受けていたため、淀城下の整備には当初の想定よりも時間がかかるというのが理由であった」としている。この記述は、『山城淀下津町記録』所収の「淀下津町古記録反古」の記述、寛永10（1633）年に尚政が淀へ入国した時に、知行が10万石になったことにより、武家屋敷が不足したので、西岡神谷村⁶³⁾にも御家中衆がいた⁶⁴⁾という記述と関連している。当時、城下町淀では、尚政が下総国古河の8万9100石余から、淀へ10万石で入封したので、家臣を相次いで雇っていること、そして淀では武家屋敷が不足していたこと、尚政は入封の段階から城下町の整備を行っていたことが確認された。なお、三郎右衛門は慶安2（1649）年56才で没し、石清水八幡の神応寺に葬られた。「淀惣絵図」に記載されている人物「山本勘介」は三郎右衛門の嫡子、菅助（晴方）である。寛永9（1632）年生まれで、三郎右衛門の死後、家督を相続した。永井家の家臣として、尚政、尚征、尚長の3代に仕えた。万治3（1660）年には、甲州流軍学の創始者で、『甲陽軍鑑』の編者である小幡景憲とも親交をもち、景憲から甲州流軍学の奥義を伝授された。つまり、江戸時代の山本勘介も兵法で活躍していたことが分かる。

寛文9（1669）年に尚征が丹後国宮津藩に転封すると、山本勘介も宮津へ向かった。延宝8（1680）年8月、尚長の改易により作成された、永井家家臣団の分限帳である、「永井信濃守様分限帳」⁶⁵⁾によれば、「山本菅助」の記載があり、その存在を宮津で確認することができる。山本勘介は、家老、家

老分に次ぐ、「表用人」、すなわち、家老に次ぐ重臣で、家老の命を受けて藩政全般を補佐する職で、300石として記されている。山本勘介は、永井家の宮津時代も家臣として活躍していたことが分かる。

延宝8（1680）年尚長が殺害され、永井家が断絶すると、2年ほどの牢人生活を経て、天和2（1682）年常陸国土浦藩主松平信興^{のぶおき}に仕官し、天和3（1683）年には、土浦城改修の惣奉行となり、大手口（高津口）と搦手口（真鍋口）の大改修を行い、大手は武田流の出枅形、搦手は二重丸馬出に仕上げたとされる。貞享4（1687）年には、山本勘介は松平家の家老職となった。つまり、山本勘介は、松平家で兵学を司り活躍していたことが確認できる。

したがって、絵図の景観の年代は、山本勘介が家督相続を行う慶安2（1649）年以降、山本勘介が淀を離れ、宮津へ向かう寛文9（1669）年以前となる。

なお、山本勘介と淀の城下町絵図との関係でいえば、注35) (f) で述べた、永青文庫所蔵「山城国淀之城之絵図」が注目される。熊本大学文学部附属永青文庫研究センターの北野隆の解説によれば、「永青文庫には「小幡勘兵衛本書を以写之」と記された絵図が二三枚存在する。この内、七枚は「小畑勘兵衛殿より来ル写陣取之絵図 寛永拾壹年三月六日」と記された袋に入り、他の十六枚は「絵図 拾六枚」と記された袋に入っている。永青文庫に慶安五年（一六五二）二月九日、尾（小）畑勘兵衛景憲より家老米田左馬允あての書状が存在する。（略）この内「小幡勘兵衛よりの軍書」とは、甲州流兵法を記した『甲陽軍鑑』である。（略）今回掲載の絵図は『甲陽軍鑑』の附図であり、『甲陽軍鑑』と一連のものである。（略）図版9「山城国淀之城之絵図」は、山本勘助との関係で描かれた絵図である。『甲陽軍鑑』では山本勘助について武田家の軍師・参謀的存在とされ、また築城術にすぐれ小諸城などの縄張を行ったという。後には徳川氏に仕え、さらに浪人し甲斐の国にいたが、寛永十年頃に山城国淀藩主永井尚政の淀城に再仕官し「勘助」と名乗ったという。以上九枚の絵図が『甲陽軍鑑』の附図である」⁶⁶⁾とある。つまり、永青文庫所蔵「山城国淀之城之絵図」は、「小幡勘兵衛殿より来ル写陣取之絵図 寛永拾壹年三月六日」と記された袋に入り、表紙には「小幡勘兵衛本書を以写之」と記されていることから、『甲陽軍鑑』を記した小幡勘兵衛景憲から細川家へ、寛永11（1634）年3月に来て筆写された絵図の1枚で、『甲陽軍鑑』の附図であるとしている。小幡景憲がどのようなルートでこの絵図

を入手したのかは不明であるが、『甲陽軍鑑』の刊本には、この絵図は収録されていないこと、そして細川家へ絵図を提供した寛永11（1634）年以前の寛永10年（1633）8月には、山本三郎衛門（勘助）は淀に到着していることから、この絵図は淀藩に仕官した山本三郎衛門（勘助）から小幡景憲に提供された可能性がある。

注

- 61) 山梨県立博物館監修・海老沼真治編（2013）：『「山本菅助」の実像を探る』、戎光祥出版。
- 62) 前掲61) pp.56-72、pp.125-142、pp.160-188。
- 63) 現在、京都府長岡京市神足と考えられる。『京都府の地名』によると、「当時（＝室町時代）神足は「かんたり」の読みがあったことが右文書で判明するが、同時期の某書状案（同文書）（＝九条家文書）には神足氏をさして「かんとに」とも称している」とあることから、神谷村＝神足村の可能性が高い。なお、神足の隣の勝龍寺、後に神足には、寛永10（1633）年から慶安2（1649）年まで、尚政の弟直清を藩主とした長岡藩が置かれ、陣屋が設置された。平凡社編（1981）：『日本歴史地名大系 26 京都府の地名』、平凡社、p.289。
- 64) 前掲6) p.373。
- 65) 宮津市史編さん委員会編（1997）：『宮津市史 史料編第2巻 近世1』、宮津市、p.231。
- 66) 前掲35) 『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編2』、pp.188-190。

（以下次号）

別表 城下町淀の年表（16世紀末期～18世紀初期）

和暦	西暦	月日	事項	出典
文禄4年	1595年	-	淀古城が破却される	-
慶長元年	1596年	-	豊臣秀吉が中興開基	元禄年間淀下津町古記録之写
慶長2年	1597年	-	高臣秀吉、河村与三右衛門と木村宗右衛門に朱印を与え、淀船支配を命ずる	過書座二十石船由緒書
慶長3年	1598年	-	長円寺が中興開基	元禄年間淀下津町古記録之写
元和9年	1623年	閏8月20日	伏見城廃城に伴い、松平定綱に淀城の築城を命じる	徳川実紀、寛政重修諸家譜、元禄年間淀下津町古記録之写
寛永2年	1625年	正月11日	遠江国掛川から転封。所領は3万5000石となる	藩翰譜
寛永2年	1625年	-	松平定綱は淀城を築城し、城を賜る	寛政重修諸家譜
寛永3年	1626年	8月	淀城造営料として銀十貫目を賜る	寛政重修諸家譜
寛永3年	1626年	8月	徳川秀忠、淀城を台覧	寛政重修諸家譜
寛永3年	1626年	8月	徳川家光、淀城に宿営する	寛政重修諸家譜
寛永8年	1631年	-	光明寺が中興開基	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永9年	1632年	-	松平定綱の二男定良が淀で生まれる	寛政重修諸家譜
寛永10年	1633年	3月25日	松平定綱が美濃国大垣へ移封	寛政重修諸家譜
寛永10年	1633年	3月25日	永井尚政が下総国古河から移封（10万石）	寛政重修諸家譜
寛永10年頃	1633年頃	-	家中屋敷不足のため、西岡神谷村にも家中衆あり	淀下津町古記録反古
寛永11年	1634年	-	高福寺、長円寺、東雲寺が代官町裏通りへ移転	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永11年	1634年	-	文相寺が開基	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永14年	1637年	-	永井尚征長男尚房が生まれる	寛政重修諸家譜
寛永15年	1638年	-	木津川筋の川運が完成する	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永15年	1638年	-	新町の家が建ち始める	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永15年	1638年	-	木津川筋の屋敷が完成する	淀下津町古記録反古
正保3年	1646年	-	河内国絵図、淀城絵図を幕府へ提出する	寛政重修諸家譜
承応3年	1654年	3月13日	永井尚政が禁裏造営の総奉行となる	寛政重修諸家譜
承応3年	1654年	-	淀大明神の御旅所が下津町から新町へ移転	元禄年間淀下津町古記録之写
承応3年	1654年	-	永井尚征三男尚長が生まれる	寛政重修諸家譜
明暦元年	1655年	2月18日	高福寺、長円寺、東雲寺が代官町で焼失	元禄年間淀下津町古記録之写
明暦3年	1657年	-	高福寺、長円寺、東雲寺が代官町から新町へ移転	元禄年間淀下津町古記録之写
明暦3年	1657年	4月29日	永井尚政内室（内藤清成女）が死去	濃州加納城主永井肥前守家記録
明暦4年	1658年	2月28日	永井尚政が隠居し、三男尚征が家督を継ぐ（7万3600石）	寛政重修諸家譜
万治元年	1658年	-	永井尚征四男の直種（亀之助）が淀で生まれる	寛政重修諸家譜
寛文5年	1665年	7月19日	永井尚征長男の尚房が父に先立ち死去（29歳）	寛政重修諸家譜

和暦	西暦	月日	事項	出典
寛文8年	1668年	9月11日	永井尚政が淀で死去 (82歳)	寛政重修諸家譜
寛文9年	1669年	2月25日	永井尚征が丹後国宮津へ移封	寛政重修諸家譜
寛文9年	1669年	2月25日	石川憲之が伊勢国亀山から移封、1万石加増 (6万石)	寛政重修諸家譜・難破録
延宝元年	1673年	12月19日	小橋と孫橋の掛け直しが完成	石川家譜
延宝2年	1674年	4月11日・12日	淀で洪水	石川家譜
延宝5年	1677年	4月5日	五畿内検地につき、幕府から山城一国の検地を仰せつけられる	石川家譜
延宝7年	1679年	6月21日	山城国検地をつとめたことにより、幕府から家臣等に時服白銀を賜る	寛政重修諸家譜
天和2年	1682年	4月25日	石川昌能が父憲之に先立ち死去 (26歳)	難破録・石川家譜
天和2年	1682年	8月2日	朝鮮人が淀を通るにつき、馳走の命あり	難破録・石川家譜
元禄6年	1693年	-	新町の淀屋敷に召し上げられ、池島を築く	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄6年	1693年	12月	淀屋敷敷地に弁財天社が建立される	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄7年	1694年	1月	竹生島より弁財天が勧請される。毎年正月に開帳あり	元禄年間淀下津町古記録之写・石川家譜
元禄8年	1695年	12月	稲荷社が建立される	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄10年	1697年	閏2月4日	幕府から山城国絵図の作成を仰せ付けられる	石川家譜
元禄11年	1698年	8月19日	伊勢宮が天下津町端へ移転	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄12年	1699年	10月6日	膳匠町が雷田町と改称する	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄13年	1700年	3月25日	納所町出火、家118軒焼失	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄14年	1701年	6月	伊勢宮が元の川島へ移転	寛政重修諸家譜
元禄14年	1701年	8月18日	淀で洪水、伏見堤と京堤が切れる	寛政重修諸家譜
宝永3年	1706年	正月27日	石川勝之が祖父憲之に先立ち死去 (32歳)	難破録
宝永3年	1706年	2月25日	石川憲之が隠居し、義孝が家督を継ぐ	寛政重修諸家譜
宝永4年	1707年	4月25日	石川憲之が病氣養生のため、淀への引越が認められる	寛政重修諸家譜
宝永4年	1707年	7月11日	石川憲之が淀で死去 (74歳)	難破録
宝永4年	1707年	10月4日	淀で大地震	寛政重修諸家譜
宝永7年	1710年	9月2日	石川義孝が死去 (52歳)	寛政重修諸家譜
宝永7年	1710年	10月23日	石川総麿が家督を継ぐ	寛政重修諸家譜
宝永8年	1711年	2月15日	石川総麿が備中国松山へ移封	寛政重修諸家譜
宝永8年	1711年	2月15日	戸田光熙が美濃国加納から移封 (6万石)	寛政重修諸家譜
正徳2年	1712年	-	戸田光熙三男、光慈が淀で生まれる	寛政重修諸家譜
享保2年	1717年	9月4日	戸田光熙が死去 (44歳)	寛政重修諸家譜
享保2年	1717年	11月1日	戸田光慈が家督を継ぐ	寛政重修諸家譜
享保2年	1717年	11月1日	戸田光慈が志摩国鳥羽へ転封	寛政重修諸家譜

教科書データベース初期構築の完了と企画展示 「島根大学教科書コレクションにみる教科書のあゆみ」

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ 昌子喜信

1. はじめに

島根大学附属図書館（以下「本学図書館」という。）は、主に前身校から受け継ぎ、長らく未整理の状態で保管していた教科書資料の整理及びデータベース化の作業を2013（平成25）年度から開始し、2017（平成29）年度はじめに完了した。これらの教科書資料群（以下「教科書コレクション」という。）は異なる来歴の複数の資料群から構成されており、来歴ごとの資料群の概要と整理作業及びデータベース化作業の概要を中間報告として先に報告したところである¹⁾。

本稿は、データベースの初期構築作業が完了したことにより明らかになった教科書コレクションの現況について報告するとともに、2017（平成29）年10月に開催した企画展「島根大学教科書コレクションにみる教科書のあゆみ」展について報告を行うものである。

2. 教科書コレクション

2.1 教科書コレクションの現況

教科書コレクションは、表1の区分ごとに整理を行い、データベースに登録した²⁾。それぞれの区分ごとの点数・冊数を整理すると表1のとおりである。

表1 教科書コレクションの区分ごとの点数及び冊数

区 分	点数 (書誌件数)	冊数 (所蔵件数)
①児童・生徒用教科書（現行検定教科書以前）	1,286	3,304
②児童・生徒用教科書（現行検定教科書）	5,943	13,422
③師範学校 学生用（教師教育用）教科書	183	301
④旧制松高 学生用教科書	1,542	1,851
⑤農科大学 学生用教科書	166	210
⑥教育課程文庫 (①②に該当するものを除く)	2,052	2,344
⑦CIE	268	285
合 計	11,440	21,717

整理作業及びデータベース登録作業が完了したことにより明らかになったコレクションの現況を以下に整理しておく。

①児童・生徒用教科書（現行検定教科書以前）

この区分の教科書は、年代的には江戸時代の終わり頃の「往来物」（平安時代から明治初め頃まで使用された教科書）から現行検定教科書制度が始まる1948（昭和23）年までのものが含まれる。和装本と洋装本とがあり、同じ請求記号の体系の中で整理をしているが、保管上の都合により配架場所を分けている。

これらの教科書の中には、表紙に「松江図書館」のラベルが貼られているものが約330点・約1,200冊ある。このラベルが貼られた図書は、江戸時代終わり頃から明治30年頃までの刊年をもつもので、和装本に多く、洋装本にも若干みられる。これは、1899（明治32）年に設立された私立松江図書館の後身である島根県立図書館から、新制島根大学発足後に島根大学附属図書館松江分館（教育学部が置かれた外中原キャンパスにあった）に寄贈されたものである³⁾。なお、「松江図書館」のラベルが貼られた図書（和装本）は、本学図書館の第2貴重資料室にも多数収蔵されている。第2貴重資料室の「松江図書館」のラベルが貼られた図書は、島根県立図書館から文理学部が置かれた川津キャンパスの附属図書館本館に寄贈されたものである。この中でもこの期の教科書が一定数含まれており、今後調査が必要であると考えている。

「松江図書館」のラベルが貼られている教科書の他は、1875（明治8）年設立の小学教員伝習所に始まり、その後、松江師範学校、島根県師範学校、島根県尋常師範学校、島根県師範学校、官立島根師範学校を経て島根大学教育学部へと変遷をたどっていく「師範学校」の流れの中で受け継がれてきたものである⁴⁾。

②児童・生徒用教科書（現行検定教科書）

この区分の教科書は、現行の教科書検定制度が始まる1949（昭和24）年から概ね昭和30年代半ば頃までの教科書が約6割を占める。松江分館（教育学部分館）時代に作成された8分冊からなる教科書目録の第8分冊目は、表紙に『島根大学附属図書館教育学部分館 教科書目録（昭和34年度使用）』とあり、昭和29年～昭和35年発行の教科書が掲載されている⁵⁾。教科書目録は、この目録を最後にその後は編纂されなかったようである。外中原にあった教育学部分館が川津の本館に統合されたのが1961（昭和36）年であり、本館統合を契機として教科書の組織的な収集がなされなくなったものと考えられる。

さらに、現行検定教科書の内、約6割（約3,200点・約8,200冊）が「教育課程文庫」⁶⁾として寄贈を受けたものである。採択用の見本版が全体の7割近くを占めている。教育課程文庫とそれ以外のもの別に見本版と正規版の冊数割合を示すと次のとおりである。

表2 見本版と正規版の点数及び冊数

	見本版		正規版	
	点数 (書誌件数)	冊数 (所蔵件数)	点数 (書誌件数)	冊数 (所蔵件数)
教育課程文庫	2,196	5,660	1,012	2,600
教育課程文庫以外	1,691	3,363	818	1,799
合計	3,887	9,023	1,830	4,399

③師範学校 学生用（教師教育用）教科書

この区分の教科書は、教育学部の前身である島根師範学校（その前身校を含む）の教員養成課程の教科書として使用されたものである。この区分で整理された教科書は冊数が少なく、実際に師範教育で使用された教科書の多く

はここに含まれていないようである。師範学校の図書館で使用された図書は、積層書庫の4階（所在：「師範」）に保管されているが、この中にも師範教育で使用された教科書が含まれていると思われる。今後、師範学校の教育課程で使用された教科書のタイトルを明らかにする作業をとおして、書庫4階の「師範」の所在の図書の中から師範教育で使用された教科書が見つかる可能性がある。

④旧制松高 学生用教科書

この区分の教科書は、文理学部の前身である旧制松江高等学校で使用された教科書であり、新制大学発足時に川津キャンパスの附属図書館本館に引き継がれた。表紙裏に教科書であることを示すラベルが貼られている。この区分で整理された教科書は、国語、古典、英語、ドイツ語などの教科書が多くを占めており、理系科目の教科書はほとんど含まれていない。その理由は定かではないが、1949（昭和24）年の島根大学発足時の文理学部が、その後、1978（昭和53）年に法文学部と理学部に分かれたことに伴って何らかの資料の移動が発生し、理系科目の教科書がその時に分離されたとも考えられる。

⑤農科大学 学生用教科書

この区分の教科書は、農学部の前身である島根県立農科大学（その前身校を含む）で使用された教科書である。ただし、この区分で整理された教科書は、農科大学の教育課程で使用されたすべての教科書を網羅しているわけではなく、その一部のようなものである。島根県立農科大学の前身である島根県立農林専門学校が設立されたのは1947（昭和22）年であり、使用された教科書の多くは1949（昭和24）年に始まる教科書検定制度による検定教科書である。

⑥教育課程文庫（①②に該当するものを除く）

この区分の資料は、島根大学に設置された「教育課程文庫」⁷⁾に含まれる教育関係図書であり、米国の教科書及び教育専門書と日本の教育専門書が含まれる。②の区分の教科書にも「教育課程文庫」として寄贈されたものが含まれるが「児童・生徒用教科書」の区分として整理し、この区分には含めない⁸⁾。なお、この区分に含まれる教育関係図書の内、米国の教科書について

は、本学を含む「教育課程文庫」所蔵機関の総合目録が東京学芸大学によって公開されている⁹⁾。

⑦CIE

この区分の資料は、「CIE」のスタンプが押印された資料群である。「CIE」は、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）の下部組織である民間情報教育局（CIE）であり、CIEによって全国23か所にCIE図書館（Information Center）が設置された¹⁰⁾。この区分の資料には、次の2つの系統のものが含まれる。

a) 「C.I.E.寄託図書」または「Donated SCAP CIE」のスタンプが押印され、附属図書館松江分館で受入したことを示すスタンプが押印されたもの（受入日付は1949〈昭和24〉年～1951〈昭和26〉年頃）。

b) 「SCAP CIE Information Center HIROSHIMA」のスタンプが押印されているもの。受入したことを示すスタンプは押印されていない。

b) については、図書の分野がいずれも農学関係であることから、広島に設置されたCIE図書館¹¹⁾から島根県立農科大学に寄贈されたものと考えられる。農科大学から受け継いだ図書は、積層書庫7階（所在：農大）に保管されており、この中にもb) のスタンプが押印されているものが含まれている可能性がある。

2.2 今後の収集方針

前節において、データベースの初期構築作業が完了したことに伴い明らかとなったコレクションの現況を概観した。教育課程文庫を除けば、いずれも系統だてて収集されたものではないため、教科書史的に重要な教科書が漏れていることもある。また、多巻ものの中に欠本があるものもある。今後は、次のような方針で収集を行いたい。

- ・教科書史の上で重要なものや欠本は、寄贈、復刻版などにより補充する。
- ・県内の小学校、中学校で使用されている主な出版社の教科書は、現在継続的に購入されてきているが、今後も継続して購入する。

3. 教科書展

教科書コレクションの整理及びデータベースの初期構築が完了したことを受けて、教科書コレクションを紹介する企画展を2017（平成29）年10月に開催した。本章では、企画展示の概要について報告する。

3.1 展示の方針とテーマ

企画展の企画及び準備は、附属図書館研究開発室の室員を中心に館内でチームを組んで行った。本学の教科書コレクションは、系統だてて収集されたものではないために網羅的なコレクションとはなっていないが、初等・中等教育で使用された明治初期から昭和30年代にかけての教科書が年代を追って残されており、コレクションの柱となっている。展示の方針として、本学教科書コレクションの全体像を紹介することを一つの目的としつつも、総花的にならないようにテーマを絞ることにした。

テーマは、1872（明治5）年の学制の公布前後の頃から昭和30年代半ばの第3次学習指導要領の改訂の頃までを年代の範囲として、この間の学校制度の変遷と関連づけながら、教科書のあゆみをたどることにした。特に初等教育で使用された教科書が時代の流れの中でどのように影響を受けながら変わってきたのかを展示をとおして提示することにした。

3.2 展示構成

展示は次の6部構成とし、冒頭に本学の教科書コレクションの全体像を概説したパネルと学校制度と教科書制度の変遷を示す年表を掲示した。

- ①近代教育の幕開け（学制の発布、翻訳教科書、儒教主義への転換）
- ②検定制度のはじまり（小学校令、教育勅語、明治検定制度）
- ③教科書国定制度のはじまり（第1期国定教科書・第2期国定教科書）
- ④大正デモクラシーから戦争の時代へ（大正デモクラシーと第3期国定教科書、国家主義の高まりと第4期国定教科書、国民学校と第5期国定教科書）
- ⑤教育の民主化（戦後の教育改革、学習指導要領、文部省著作教科書）
- ⑥戦後の検定教科書のはじまり（検定制度の整備、第2次学習指導要領、第



図1 展示の様子



図2 ギャラリートーク

3次学習指導要領)

上記の構成ごとに解説パネルを作成し、関連する教科書を展示した。資料保存上の問題がないと判断される教科書は、実際に手に取って試みることができるように配置した。展示した教科書は本稿末尾の別表のとおりである。

なお、開催期間中にギャラリートークを2回開催し、展示解説と教科書コレクションが置かれている書庫内を案内する書庫ツアーを実施した。2回合わせて20人の参加があった。

3.3 アンケートから

2017（平成29）年10月10日（火）から10月22日（日）までの2週間の展示期間中における、来場者数と1日平均入館者数は表3のとおりである。来場者数は、展示室入口に設置した簡易アクセスカウンターで取得したデータを集計したものである。

表3 展示会来場者数

展示期間	日数 (日)	来場者数 (人)	1日平均来場者数（人）		
			平日	休日	全期間
10月10日（火） ～10月22日（日）	13	326	33	8	24

来場者に対してアンケートを実施し、19名から回答を得た。結果は図3から図5のとおりである。

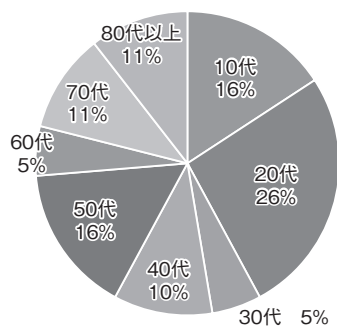


図3 回答者の年齢

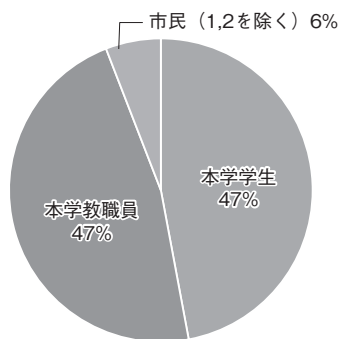


図4 回答者の区分

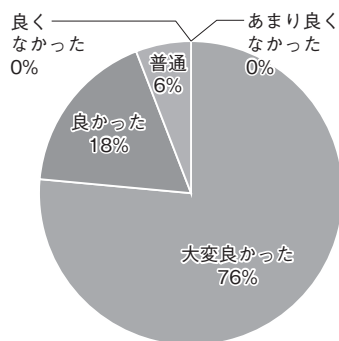


図5 展示内容の満足度

アンケートの自由記述の中から、「評価する意見」と「要望」を抜粋して示す。

評価する意見

- ・ 書庫内のコレクションを見て死蔵したままはもったいないと思っていたので、またとない企画と思いました。
- ・ 本学の蔵書であり、このようにテーマとして展示していただくことで手に取って見る事ができてありがたかったです。
- ・ 70年ほど前の教科書の実物を手にとって読めるところがよかった。
- ・ 手にとって見る事ができて楽しかった。「コレクション」らしい量的な厚みがあって見栄えがしていると思う。
- ・ 教科書の歴史がわかって、とてもよかった。
- ・ 昔と現在の教科書の違いが見られたのが貴重でした。
- ・ 歴史の授業で学んだ書籍を直に見られたことがよかった（例、学問のすすめ、教育勅語）。
- ・ 教科書の中身も時代によって変わるという事がよくわかった。
- ・ 昭和30年の小学校理科の本等見てみると現在よりも面白そうな感じがしました。絵本というか、本感覚でなかなか面白かったです。

要望

- ・ 主要教材だけでなく、すべての教材の教科書を展示してください。
- ・ 新旧含め、データベースとして閲覧できるようにならないかご検討頂けると嬉しいです。
- ・ 充実した内容に感激しました。壁面の掲示物もゆっくり読ませていただきたく図録を発行していただきたいと思います。
- ・ 何度でも展示しても良い。
- ・ 昭和20年代後半以降の教科書も豊富なので、予想される来場者層に対して、「子供の頃に使ったあの教科書が?」といったアピールも可能だと思う。
- ・ 入口壁のパネルの文字が細かいので、少し読みづらい。額入れしてある解説板も、壁面に余裕があるので、内容を二分割して展開しては。
- ・ 戦後間もなくの新聞紙の紙質でできた教科書はないのでしょうか？

アンケート結果から、来場者の満足度が非常に高いことがわかる。自由記

述の内容を見ても、「教科書が時代の流れの中でどのように影響を受けながら変わってきたのかを展示をとおして提示」しようとした今回の展示のねらいは達成できたと言える。「要望」として挙げられている点は、今後の展示の中で改善を検討したい。

4. おわりに

教科書データベースの初期構築完了に伴い、明らかとなった教科書コレクションの現況と企画展示の概要をまとめた。最後に、今後取り組むべき課題として3点を挙げたい。

1点目はコレクションの充実である。寄贈等によって、コレクションの弱い部分を補い、充実を図っていききたい。2点目は、画像データの作成である。著作権保護期間が満了した教科書については、全ページの画像データを作成してデジタルアーカイブに搭載し、教科書データベースとのリンクを検討する。既に教科書の画像データベースを公開している機関との連携の可能性も模索する。3点目は、企画展示の継続開催である。展示を行うことでコレクションの強みや弱点がわかっていくことから、テーマを掘り下げて継続して開催したい。教員と連携して、特定の教科の教育課程や教育方法の変遷を教科書でたどるなどのテーマも考えられる。卒論研究のテーマとして教科書を取り上げる学生がいるならば、その成果を展示することも考えられよう。

注・参考文献

- 1) 昌子喜信ほか. 島根大学所蔵教科書コレクション：概要とデータベース化の取り組み. 松雲. 2016.2, no.18, p.13-32.
- 2) 前掲1) p.23
- 3) 前掲1) p.17-18
- 4) 前掲1) p.18及びp.14-15の図1「組織変遷図」
- 5) 前掲1) p.14-17
- 6) 前掲1) p.18-19
- 7) 前掲1) p.18-19
- 8) 前掲1) p.23

- 9) 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター. “データベース”. 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター. (オンライン), http://www.u-gakugei.ac.jp/~curriect/data/sougou_01.html (参照2018-01-21).
- 10) 今まど子. “CIEインフォメーション・センターの活動”. 現代日本の図書館構想：戦後改革とその展開. 今まど子, 高山正也編著. 東京, 勉誠出版, 2013.7, p.87-154.
- 11) 前掲10) p.137-140

別表 島根大学教科書コレクションにみる教科書のあゆみ【展示リスト】

		展示資料		
教科等	資料名	編著者	出版年	
A) 翻訳教科書 (1872〈明治5〉～1879〈明治12〉)				
1	読物	西洋事情	福沢諭吉	1872(明治5)
2		学問ノススメ	福沢諭吉	1872(明治5)～1876(明治9)
3	綴字	絵入智恵の環	古川正雄	1869(明治2)～1871(明治4)
4	修身	泰西勸善訓蒙	ボンヌ [著]；箕作麟祥譯述	1879(明治12)
5		童蒙をしへ草	[チャンブル著]；福澤諭吉譯	1872(明治5)
6	理学	物理階梯	片山淳吉纂輯	1872(明治5)
7	地理	世界国尽	福沢諭吉	1869(明治2)
8	歴史	地理初歩	師範学校編	1876(明治9)
9		史略	文部省、木村正辞	1872(明治5)
B) 儒教主義の教科書 (1880〈明治13〉～1885〈明治18〉)				
1	読書	小學読本	若林虎三郎編輯	1884(明治17)
2	修身	小學修身訓	西村茂樹選録	[1879(明治12)]
3	唱歌	小学唱歌集	文部省音楽取調掛編纂	1881(明治14)～1884(明治17)
4	博物	通常動物	辻敬之 著	1882(明治15)
5		通常植物	辻敬之 著	1882(明治15)
	その他	学制	文部省	1872(明治5)
	教授法	改正教授術	若林虎三郎、白井毅編纂	1883(明治16)～1884(明治17)
		小学教師必携	諸葛信澄著述	1883(明治16)
		庶物指教	塞兒敦 [著]；永田健助譯	1878(明治11)～1879(明治12)
C) 明治の検定教科書 (1886〈明治19〉～1903〈明治36〉)				
1	読書	読書入門	文部省編輯局編	1886(明治19)
2		尋常小学読本	文部省編	1887(明治20)
3		日本読本：都市用	新保磐次著	1889(明治22)
4		日本読本：郡村用	新保磐次著	1888(明治21)
5	修身	明治修身書：尋常小学校生徒用	峰是三郎編纂	1893(明治26)
6		修身入門：生徒用	末松謙澄著	1892(明治25)
7		修身入門：教師用	末松謙澄著	1892(明治25)
8	歴史	小学歴史	小幡篤次郎編	1886(明治19)
9		小学日本歴史	教育学館編	1893(明治26)
10		小学内国史補習	新保磐次著	1901(明治34)
	その他	教育勅語衍義	那珂通世、秋山四郎謹撰	1894(明治27)
	教育理論	実用教育学及教授法	谷本富著	1896(明治29)
		科学的教育学講義	谷本富著	1896(明治29)
		ラインの教育学原理	ウィルヘルム・ライン著；湯本武比古訳	1900(明治33)
D-1) 国定教科書【第1期】(1904〈明治37〉～1909〈明治42〉)				
1	国語	尋常小学読本	文部省	1903(明治36)
2	修身	尋常小学修身書：児童用	文部省	1904(明治37)
3		尋常小学修身書：教師用	文部省	1904(明治37)
4	日本歴史	小学日本歴史	文部省	1904(明治37)
D-2) 国定教科書【第2期】(1910〈明治43〉～1917〈大正6〉)				
1	国語	尋常小学読本	文部省	1910(明治43)
2		尋常小学讀本に現はれたる植物の研究	松江市雜賀尋常小學校研究部	1915(大正4)
3	修身	尋常小学修身書：児童用	文部省	1909(明治42)
4	日本歴史	尋常小学日本歴史：児童用	文部省	1910(明治43)
5		尋常小学日本歴史：教師用	文部省	1910(明治43)

展示資料				
教科等		資料名	編著者	出版年
D-3) 国定教科書【第3期】(1918〈大正7〉～1932〈昭和7〉)				
1		尋常小学読本(黒表紙)	文部省	1917(大正6)
2	国語	尋常小学国語読本(白表紙)	文部省	1917(大正6)～1923(大正12)
3		公学校用国語読本	台湾総督府	1923(大正12)
4	修身	尋常小学修身書	文部省	1927(昭和2)～1930(昭和5)
5	国史	尋常小学国史	文部省	1920(大正9)～1921(大正10)
6		高等小学国史	文部省	1924(大正13)
7		小学国史学習の参考	文部省	1926(昭和1)
8	地理	巖川讀本	島根縣巖川郡教育會著	1933(昭和8)
	その他	國體の本義	文部省編	1937(昭和12)
D-4) 国定教科書【第4期】(1933〈昭和8〉～1940〈昭和15〉)				
1	国語	小学国語読本：尋常科用	文部省	1933(昭和8)～1939(昭和14)
2		小学国語読本学習書	河村豊吉著	1935(昭和10)～1940(昭和15)
3	修身	尋常小学修身書	文部省	1934(昭和9)
4	国史	尋常小学国史	文部省	1934(昭和9)～1935(昭和10)
5		小学国史：尋常科用	文部省	1940(昭和15)～1941(昭和16)
6		地理	尋常小学地理書	文部省
D-5) 国定教科書【第5期】(1941〈昭和16〉～1945〈昭和20〉)				
1	国語	ヨミカタ・よみかた	文部省	1941(昭和16)～1942(昭和17)
2		コトバノオケイコ	文部省	1941(昭和16)
3		初等科国語	文部省	1942(昭和17)
4	修身	ヨイコドモ	文部省	1941(昭和16)
5		初等科修身	文部省	1942(昭和17)～1943(昭和18)
6		初等科国史	文部省	1944(昭和19)
7	地理	初等科地理	文部省	1943(昭和18)
8	算数	カズノホン	文部省	1941(昭和16)
戦後の教育改革				
	墨塗教科書	ヨミカタ・よみかた	文部省	1941(昭和16)～1942(昭和17)
		カズノホン	文部省	1941(昭和16)
	その他	新教育指針	文部省	1946(昭和21)～1947(昭和22)
	社会科	くのにあゆみ	文部省	1946(昭和21)
	学習指導要領(第1次)	学習指導要領(試案)。一般編	文部省	1947(昭和22)
		学習指導要領(試案)。国語科編	文部省	1947(昭和22)
		学習指導要領(試案)。社会科編	文部省	1947(昭和22)
		学習指導要領(試案)。理科編	文部省	1947(昭和22)
		学習指導要領(試案)。算数科編	文部省	1947(昭和22)
	学習指導要領(第2次)	学習指導要領(試案)。一般編	文部省	1951(昭和26)
		学習指導要領(試案)。国語科編	文部省	1951(昭和26)
		学習指導要領(試案)。社会科編	文部省	1951(昭和26)
		学習指導要領(試案)。理科編	文部省	1951(昭和26)
		学習指導要領(試案)。算数科編	文部省	1951(昭和26)
	学習指導要領(第3次)	小学校学習指導要領	文部省	1958(昭和33)
E) 文部省著作教科書(1946〈昭和21〉～1948〈昭和23〉)				
1	国語	こくご・国語	文部省	1947(昭和22)
2.1		まことさんはなこさん	文部省	1949(昭和24)
2.2		いなかのいちにち	文部省	1950(昭和25)
2.3		いさむさんのうち	文部省	1949(昭和24)

展示資料				
教科等	資料名	編著者	出版年	
3-1	まさおのたび	文部省	1948(昭和23)	
3-2	たろう	文部省	1948(昭和23)	
3-3	大むかしの人々	文部省	1948(昭和23)	
3-4	日本のむかしと今	文部省	1948(昭和23)	
3-5	村のこども	文部省	1948(昭和23)	
3-6	都会の人たち	文部省	1948(昭和23)	
3-7	土地と人間	文部省	1948(昭和23)	
3-8	気候と生活	文部省	1948(昭和23)	
4-1	小学生の科学	文部省	1948(昭和23)	
4-2	観察と実験の報告	文部省	1948(昭和23)	
5	さんすう・算数	文部省	1947(昭和22)	
6	小学生の算数	文部省	1949(昭和24)	
F) 戦後の検定教科書(1949〈昭和24〉～現在)				
1	国語 【日本書籍】	たろうはなこくごのほん 太郎花子国語の本	日本書籍国語編修委員会 編	1953(昭和28)
1-1		太郎花子国語の本: 編集の趣意	井上越編	1953(昭和28)
2	国語 【学校図書】	一～六ねんせいのこくご (一～六年生の国語)	志賀直哉ほか	1949(昭和24)～1951(昭和26)
3		あたらしいこくご 新しい国語	柳田国男編	1950(昭和25)～1951(昭和26)
4	国語 【東京書籍】	新編 あたらしいこくご 新編 新しい国語	柳田国男編	1954(昭和29)
5		あたらしいこくご 新しい国語	柳田国男・岩淵悦太郎 編	1961(昭和36)
6		あたらしいしゃかい 新しい社会科	海後宗臣編	1951(昭和26)
7	社会 【東京書籍】	あたらしいしゃかい 新しい社会	海後宗臣編	1954(昭和29)
8		新編 あたらしいしゃかい 新編 新しい社会	海後宗臣編	1964(昭和39)
9		あたらしいりか 新しい理科	服部静夫編	1951(昭和26)
10	理科 【東京書籍】	新編 あたらしいりか 新編 新しい理科	茅誠司・服部静夫 編	1955(昭和30)
11		新編 あたらしいりか 新編 新しい理科	茅誠司・服部静夫 編	1964(昭和39)
12		あたらしいさんすう 新しい算数	彌永昌吉編	1951(昭和26)
13	算数 【東京書籍】	あたらしいさんすう 新しい算数	彌永昌吉編	1955(昭和30)～1957(昭和32)
14		新編 あたらしいさんすう 新編 新しい算数	彌永昌吉編	1964(昭和39)

2017年度島根大学附属図書館企画展示「戦争と平和を 考える2017－記録された戦争体験－」実施報告

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ 小林 奈緒子

1. はじめに

島根大学附属図書館本館では、企画展「戦争と平和を考える2017－記録された戦争体験－」を開催した（期間：2017（平成29）年11月27日～12月22日）。当館では、戦争や平和に関する資料の展示等を通して理解を深め、自由な議論の場を提供することを目的として2014（平成26）年より毎年継続して開催しており¹⁾、今年度は「記録された戦争体験」をテーマとして実施した。今回は、地域の戦争体験をより深く知るために、近隣の公共図書館や公共施設から県内の戦争体験記をはじめ、当時の「のぼり」、軍人手帳、従軍日記などを借り受け、合計約90点の史資料のほか、それらを解説するパネルを作成し展示した。

また、教養科目「平和学」と連携し、担当教員からの推薦図書もあわせて展示した。そして関連イベントとして、2回にわたって開催したギャラリートークでは、本学名誉教授の吉野蕃人氏と常松正雄氏に、それぞれシベリア抑留体験と勤労働員の体験について話をいただいた。本稿では、これら一連の企画展および関連イベントについて報告する。

2. 企画展示について

2.1 企画展の概要

今回の企画展「戦争と平和を考える2017－記録された戦争体験－」は、2017（平成29）年11月27日から同年12月22日まで、当館1階展示室にて開催した。期間中、展示室は当館の開館時間にあわせ、平日朝8時30分の開館から21時30分の閉館まで、土日祝日は朝10時から17時30分まで開室した。開室期間は合計26日間で、入場者数は642人に上った²⁾。平日の平均は29.20人、

休日は9.67人、期間平均は24.69人であった。

2.2 開催の趣旨

本学の前身、旧制松江高等学校（以下、旧制松高）では、多くの在学生在、戦場に行き命を落したり、あるいは広島・長崎で被爆死したりなどしている³⁾。また、日本の大学・研究機関は、先のアジア・太平洋戦争で戦争に協力する学問を生みだし、軍事研究に深くかかわり、多くの学生を戦場に送り出したという苦い経験をもつ。戦後、この戦争遂行に加担したあやまちを二度とくりかえさないため、大学や研究機関は平和目的の研究のみに従事し、軍事研究は行わないことを固く誓った⁴⁾。

そのような歴史を踏まえ、大学図書館として様々な資料提供の活動を通して利用者に情報を提供するという行為を考えた時、当館が所蔵する永井隆⁵⁾の寄贈図書や、先の戦争で中国にて捕虜となった後に帰国し、日中の友好のため尽力した山陰中国帰還者連絡会（以下、山陰中帰連）の資料⁶⁾などをはじめ、戦争や平和に関する資料の展示を通して理解を深め、自由な議論の場を提供することは大切な活動である。

また、本学では近年、教養科目として「平和学」が開講され、多くの学生が受講していることから、この授業と連携し、図書館が必要な資料や情報を提供する意義は大きい。本企画展は、2014（平成26）年より毎年継続して開催してきたところであるが、継続的な開催が重要との観点から、今年度は「記録された戦争体験」のテーマで開催した。

2.3 準備と構想

まず、企画展を計画するにあたって、大まかな計画を立て企画書を作成する段階で当館の有志スタッフでチームを作り、2回の打ち合わせを重ねながら準備を進めた。例年夏に開催していたが、他企画展とのスケジュール調整の結果、11月下旬～12月の開催が決まった。

これまでの企画展では、永井隆や山陰中帰連の資料を取り上げてきたが、今回は戦争体験を間接的に知る方法として身近な「本（＝戦争体験記）」を重点的に取り上げることにした。書かれた戦争体験記を「読んで学ぶ」事を勧め、戦争体験がその人の人生にとってどんなものであったのか思いを寄せ、

一人一人の人生をより多く知って考える機会としてほしいという企図があった。できるだけ地域の身近な戦争体験記を集めようと当館の蔵書を当たってみたが、思いの外戦争体験記は少なく思案していたところ、打ち合わせ時に他のスタッフから「近隣の公共図書館なら多くの戦争体験記を持っているので、展示用に貸出を依頼してみてもどうか」というアドバイスがあった。近隣の公共図書館から展示用に資料を借り受けた例がこれまでなく、色々と手探りでの準備であったが、島根県立図書館、松江市立中央図書館へ相談したところ、快く応じていただいた。結果として、選書から貸出までお世話になり、合計21冊の貴重な地域の戦争体験記を借り受け展示することができた。また、企画展に並べたい図書については、当館の蔵書及び他館からの借受図書だけではなく、新たに資料を購入し、準備を進めた。

今回企画展を構想する中で、当館の地域資料室にある一冊の本に出会った。曾田幸広編『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』である。地域の戦争体験記を拾っていく作業の中で見つけた資料で、この中で紹介されている日記には、梅田房雄氏に赤紙が来て応召され従軍し、やがて病になり帰国する間一日も休まず日々の出来事が記録されている。その後彼は戦病死するのだが、この日記は遺族が大切に保管しており、その後彼の弟である梅田敏男氏が文字を起こし、まとめられた。それがこの資料である。この本はやがて甥に当たる曾田幸広氏が第4版を編集し刊行されるが、この第4版の末尾に一つの新聞記事が紹介されていた。それは、松江市雑賀町から梅田房雄氏と同じ日に中国戦線へ出征した、山村栄吉氏についての紹介であった。彼も同様に手帳を記しており、中国北部にある現在の山西省太原市で戦死したが、その手帳は戦友が持ち帰り、遺族の手に渡って現在は同町の公民館に保管されている、という内容のものだった⁷⁾。曾田氏は、この日記の最後の記述が1937（昭和12）年11月8日で終わっていることについて触れ、梅田房雄氏の日記にも当時の状況が克明に伝わってくることを述べていた。そこで、松江市雑賀公民館へ問い合わせたところ、確かにその資料はあり、現在は同町の松江市先人記念館で保管しているという旨の回答を得た。幸い、同記念館の資料を管理している福岡修之前雑賀公民館長とは面識があり、話はすぐに進んだ。驚いたのは、この山村氏の手帳のみ借りるつもりであったのが、他に山村氏関係の資料が軍服から出征時に掲げられた「のぼり」まで、次から次に貴重な史料を

出されてきたことであった。さらには、当時を知る資料として、双六や雑誌、慰問袋、遺言書入れ、出征時に渡された寄せ書き日の丸など、多数紹介いただいた。しかし、今回は「本」の展示をメインにしたいという思いもあって、ごく一部の資料のみ借り受けることになった。詳しくは展示目録をご参照いただきたい（別表、p.62-64）。

『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』から、このように別の資料をたぐり寄せることができたわけだが、他にもこの梅田房雄氏の出征前の日記・手紙が一括された『戦雲春愁記』があり、こちらは浜田市立中央図書館のご厚意で展示用に借り受けた。

他館から借り受けた資料については、利用者が誤って館外に持ち出さないよう工夫が必要であったため、有志スタッフと検討した。その結果、資料に透明のカバーを被せ、その中に「持ち出し禁止」の用紙を挟み込みこむことにした。

また、今回は来場者になるべく多くの本を手にとって読んでもらいたいと考え、展示ケースよりも長机を多く配置し、その上に展示用図書を多く並べた（図1）。また、展示用図書については、それぞれの特に読んでもらいたいページを書いた紙を挟み、視覚的效果を狙った（図2）。

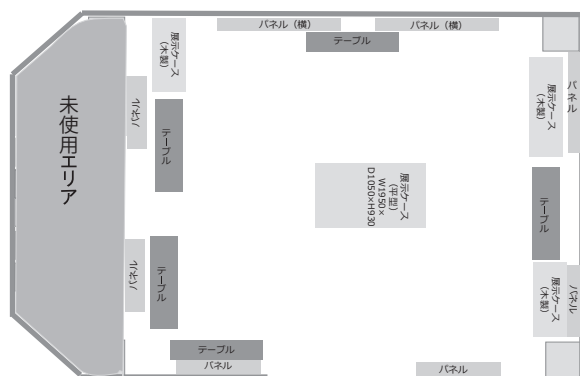


図1 展示室レイアウト

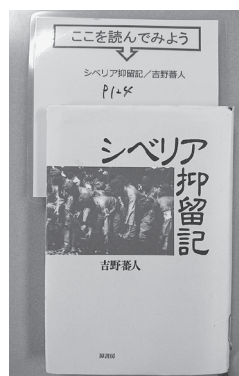


図2 展示の工夫

2.4 展示内容

展示は、作成した7枚の解説パネルと、これに対応する形で資料を紹介した。

一、「資料が語る戦争体験①従軍体験」では、先述した『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』を紹介し、解説を行った。また、山村栄吉氏の手帳について触れ、パネル下の展示ケースで山村氏関係の史料の展示を行った。また、展示ケース横に長机を配置し、関連図書を展示した。

二、「資料が語る戦争体験②勤労働員」では、埼玉の女学校時に勤労働員を経験した初見千恵子氏の手記を取り上げ、解説を行った。初見千恵子氏の手記については、彼女の娘であり今回手記の文字起こしをした、本学生物資源科学部准教授の初見真知子氏から本学法文学部の関耕

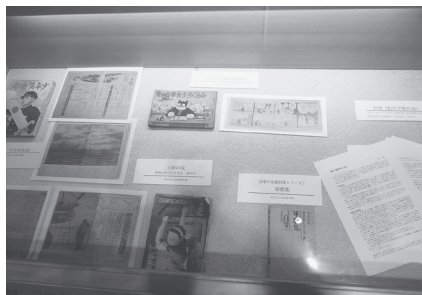


図3 展示ケース(右端が初見氏の手記)

平准教授へ2017年春資料提供があった際に、筆者へも提供いただいていた。今回の展示にあたって、初見准教授に手記の展示および印刷・配布について了解を得て、来場者に提供した。また、このパネルの下でも、展示ケースを配置し銃後の様子が分かる当時の雑誌などを展示した(図3)。

三、「資料が語る戦争体験③空襲・原爆・沖縄戦」では、銃後の戦争体験を凝縮させた内容となった。ここでは、展示ケースは配置せず、長机を配置し「銃後、空襲、原爆、沖縄戦の体験記」をキーワードに集めた図書の展示を行った。

四、「近隣の戦争被害」では、あまり空襲被害がなかったと言われていた島根・鳥取にも、戦争末期には多くの敵機が飛来し攻撃を受けていたことを解説した。また、その関連図書を近くに展示した。

五、「戦後を生きる」では、元兵士たちが戦後どのような思いを抱えて生きていったのか、それらが分かる資料として先述した山陰中帰連資料や永井隆寄贈図書を展示ケースにて展示し、パネルにて解説を行った。

六、「戦争体験を語り継ぐ～県内の戦争体験記～」では、公共図書館から借り受けた資料を中心に展示を行った。ここでは、県内の戦争体験記の特徴として、松江に歩兵第63連隊、浜田に歩兵第21連隊があったことなどからこれらの従軍体験記や関連資料が多かったこと、広島と地理的に近いことから広島原爆の体験記や看護体験記なども見られることなどを解説した。

七、最後に「なぜ戦争体験を語るのか」では、それぞれの体験記に記された本人・遺族の思いを取り上げた。また、関連する図書をここでも展示した。

また、室内の中央に展示ケースを配置し、松江市先人記念館から借り受けた資料を展示した。山村栄吉氏を出征時に送り出した際の「のぼり」も借り受けたが、大きすぎて全容の展示が不可能であったため、全体の写真を撮影し、これをキャプションとともに壁面にはり、壁面パネルに吊すような形で展示した（図4）。



図4 のぼりの展示

2.5 広報

広報活動としては、事前広報として企画書・ポスターが出来上がった段階でマスコミへの周知を行った。また、併せて学内のデジタルサイネージ（大学正門、メインストリート、大学生協など）での掲示も行った。

このほか、各社の新聞記者へ個別にメールで企画展の案内を出し、取材に応じた。

その他、チラシを作成し館内入り口での配布を行い、ポスターは図書館入口ほか館内数カ所に掲示を行った（図5）。

また、ホームページや図書館Twitterなどで周知を行い、来場を呼びかけるとともに、「平



図5 企画展のポスター

和学」の教員に学生への周知を依頼した。学内の教職員一斉メールでも企画展開催を周知し、このメールを見て実際に来場した教員も少なくなかった。

開催後は、企画展の様子をなるべく発信しようと、図書館ブログに「開催のお知らせ」、「企画展のこぼれ話①」、「企画展のこぼれ話②」、「ギャラリートーク開催」などを投稿し周知した(図6)⁸⁾。



図6 図書館ブログ

2.6 アンケート結果

来場者にアンケートをお願いした。方法としては、展示室入口近くにアンケート用紙と回収箱を設置し、記入してもらうものである。その結果、21名の回答があった。来場者数642名でみると、3%の回収率となるため、アンケートの方法についても改善が必要である(図7-8、p.65-66)。

はじめに、来場者の年齢は一番多い世代が50代で、50代～80代の人が14人となり、アンケート回答者の6割を超えた。

次に、来場者の居住地であるが、ほとんどが松江市内だった。また、これらの人々は半数が学内の学生・教職員で、半数は一般市民であった。これらの人々の来場目的を見てみると、回答者の7割にあたる15名が展示会を目的として来場しており、図書館利用のついでに来場した人は6名(2割)だった。

また、この展示会を知ったきっかけについてであるが、回答者の4割にあたる9名が学内の掲示またはチラシを見て来場していた。その他、新聞・テレビで見て来場した人も数名いたが、それよりも知人などから展示会について聞いてやってきた、という人が多かった。このことは、口コミによる宣伝も有効であることが分かる。

また、展示内容については、大変良かった・良かったという回答を多く得た。ただ、もっと実物があればよかった、といった意見やゆっくり読めるチャンスが欲しい、という意見もあった。今回は「本」をメインとして展示したためであるが、今後の課題としたい。

次に、印象に残った展示としては、手記、手帳、寄せ書き日の丸の旗、郷土関連の図書などが挙げられていた。中には、「一番は壁に掛けられたパネルの文章です。図書館の意志、意欲を感じました」とコメントを寄せていただいた来場者もあった。

今後の展示内容については、「本は読むのに時間がかかるので、視覚的で分かりやすいものがあると良い」「もっと実物があれば」などの意見があった。また、「もう少し宣伝が行きわたるといいと思いました。他図書館から借りてこられるのも大変だったでしょう。また企画して下さい」といった意見もあり、広報の難しさをあらためて認識した。

今後希望する展示については、「展示している資料を借りられると良い」「続けてほしい」「一つ、一人について掘り下げた展示（要研究）」といった意見もあった。特に最後の意見は筆者も同意するところで、これまでの少しずつ様々な資料の展示、というスタイルとは別に、一つの資料について調査を行い展示する「深みのある」展示も必要であると、今回の企画の中で感じていたところであった。今後は自館の資料についてテーマを定めて、継続的に資料を調査していきたい。

3. 関連イベントについて

3.1 教養科目「平和学」との連携

今年度も教養科目「平和学」との連携が出来ないと、担当の法文学部片岡佳美教授へ相談したところ、快諾を得て協力いただいた。この「平和学」は、例年後期に開催され、15コマを様々な分野の教員が担当し、自分の専門から見た「平和」について論じる授業である。この講義をする担当教員からそれぞれ「平和学」を受講する学生にお勧めの図書を1



図9 教養科目「平和学」推薦図書展示

～数冊程度推薦してもらい、コメントもそれぞれ付けてもらっている(図9)。

これまでは、この授業と「戦争と平和を考える」企画展とは異なる時期に開催していた⁹⁾のだが、今回は同時期に開催となったことから、展示室付近で推薦図書の展示もあわせて行った。これらの図書については、通常の開架図書とは異なり、1週間のみ貸出可とした。

3.2 ギャラリートーク

毎回企画展ではギャラリートークを開催し戦争体験を聞いてきたのだが、今回の展示では、展示する資料と関連して「従軍体験」「銃後の体験」を聞くことが出来ればと思い、有志スタッフで検討を進めた。そこで、本学名誉教授の吉野蕃人氏と常松正雄氏にお願いできないか打診することとなった。吉野氏は1925（大正14）年に松江市雑賀町に生まれ、その後旧制松江中学から鳥取高等農林学校へ進学し、1945（昭和20）年2月に応召され、満州へ渡った。8月にはソ連が満州へ侵攻し、交戦するがじきに終戦を迎え、その後シベリア・オブルチュェに抑留され1948（昭和23）年5月まで過酷な重労働などを強いられた経験を持つ。

常松氏は附属図書館研究開発室の顧問も務めている。1930（昭和5）年島根県出雲市平田町に生まれ、尋常小学校4年生の時に真珠湾攻撃があり、太平洋戦争が勃発した。その頃から銃後の仕事としての勤労動員を経験し、終戦末期の1945（昭和20）年4月に旧制島根師範学校へ入学した。

ギャラリートークの依頼をするにあたり、まず折良く来館された常松氏に口頭で依頼したところ、快諾を得た。また、吉野氏については、吉野氏の著書の末尾に記された住所を頼りに依頼文を送付し、こちらも快諾を得ることが出来た。

日時はお二人のご都合と図書館のスケジュール、および学生の授業時間などを考慮して、第1回目は12月6日水曜日13：30～15：00で吉野氏にお願いし、第2回目は同月14日木曜日12：45～14：15で常松氏にお願いした。どちらも、1時間ほど当時の体験をお話いただき、残り30分



図10 ギャラリートークの様子

はフロアからの質疑応答の時間に充てることにした。参加者は合わせて30人半ば程度集まり、貴重な戦争体験に質疑応答も活発に行われた（図10）。

4. おわりに

最後に、今回の企画展で得られた成果と今後の課題について述べたい。先述した開催の趣旨のように、資料の展示を通して戦争や平和への理解を深めることは出来たように思う。また、今回企画展を開催するにあたって、チームを組んで準備を進めたことで、様々な作業をスムーズに行うことが出来た。また、その中で各所において助言や作業のサポートも多く得られた。これらは今後の他の企画展やイベントでもそのノウハウを活かすことが出来るだろう。

アンケートでもコメントが寄せられていたが、この一連の企画展を2014年から継続的に開催していることを初めて知った、という来場者も少なくなく、「戦争と平和」の切り口で毎年継続していくことの大切さをあらためて実感した。他にも、今回「平和学」との連携として推薦図書を企画展と同時期に展示したが、授業で教員から企画展の宣伝をしてもらい、学生に推薦図書を見てもらいつつ展示室へ足を運んでもらう、という流れを設定したことについても、肯定的な意見が寄せられた。ただ、実際に「平和学」の推薦図書の貸出回数が低いという現状を考えると、推薦図書の展示の方法、展示室までの導線についてはもう少し改善の余地があり、今後の課題としたい。

付記

企画展を開催するにあたり、当館の企画展有志スタッフおよび情報サービスグループのスタッフには様々な助力をいただいた。また、貴重な資料を快く提供いただいた、鳥根県立図書館、松江市立中央図書館、浜田市立中央図書館、松江市先人記念館の福岡修之氏および松江市雑賀公民館の方々には大変お世話になった。そしてギャラリートーク開催にあたっては、吉野蕃人民並びに常松正雄氏には貴重な戦争体験をお話いただいた。記して御礼申し上げる。

注

- 1) 過去の企画展については、拙稿「大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」：企画展「戦争と平和を考える2014」より」（沁雲：島根大学附属図書館報17, 32-49, 2015-03-27）をご覧ください。
- 2) 入場者数については、当館のスタッフの協力で入り口に赤外線カウンターを設置し、計測を行った。
- 3) 朝日新聞社松江支局編『旧制松江物語』（今井書店、1968年）などに詳しい。
- 4) 日本学術会議の過去の声明を参照。日本学術会議, “提言・報告等【声明】”, <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-2.html>, (参照2018-01-25)。
- 5) 永井隆は、島根県松江市にて生まれ、少年時代を現在の同県雲南市三刀屋町で過ごした。その後旧制松江高等学校ののち長崎医科大学へ進学・卒業し同大学へ就職するが、助教授だった1945（昭和20）年8月9日に原子爆弾の被害にあうが、自身も重傷のなか救護活動を続けた。その後白血病が進み、寝たきりの生活となる中、『いとし子よ』『この子を残して』他著作活動を続けた。
- 6) 第二次世界大戦の終結を大陸でむかえ、ソビエト連邦に抑留されていた日本軍捕虜のうち、1950年7月に約1000名が中華人民共和国へ引き渡され、969名が撫順の戦犯管理所へ、うち130名が太原戦犯管理所へ収容された。戦犯として拘禁されていた者たちは、1956年6月より最高人民法院の法廷において行われた日本人戦犯に対する裁判で、一部を除いたそのほとんどの、1017名が起訴免除・即日釈放となった。これらの人々が、日本に帰還後結成した組織が中国帰還者連絡会（略称：中帰連）である。中帰連の全国本部は1957年に設立されたが、島根支部は1956年9月17日に結成されており、1958年1月には鳥取支部と合併して山陰支部となった。山陰中国帰還者連絡会および同資料については、拙稿「戦争体験といかに向き合うか：山陰中国帰還者連絡会の活動を事例として」（島根大学法文学部山陰研究センター『山陰研究』4, 37-56, 2011-12-31）を参照。
- 7) 「戦死までの100日間つづる」『山陰中央新報』2011（平成23）年8月14日付。
- 8) 次のブログ記事などを参照。島根大学附属図書館のブログ, “企画展「戦争と平和を考える2017」および「平和学推薦図書」展示を開催中です！”, <http://shimadai-lib.hatenablog.jp/entry/2017/11/28/161706>, (参照2018-01-25)。
- 9) 過去の「平和学」との連携については前掲注1) 3.2を参照。

別表 企画展「戦争と平和を考える2017～記録された戦争体験～」目録

		所蔵機関
1) 資料が語る戦争体験①従軍体験（ケース展示）		
1	『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』キャプション	
2	『戦雲春愁記』キャプション	
3	戦時日記（山村栄吉氏）	先人記念館＝旧雑賀教育資料館
4	写真（山村栄吉氏）	〃
5	「支那事変の想出 元松江歩兵第六十三連隊 第十中隊戦友会」	〃
6	軍人手帳（山村栄吉氏）	〃
○テーブル展示		
1	梅田房雄従軍日記 北支転戦記	本館
2	戦雲春愁記	浜田市立図書館
3	比島バレットの思い出	松江市立中央図書館
4	悲境の大地	〃
5	凍った大地に	〃
6	戦下の青春	〃
7	シベリヤの記録	〃
8	先の大戦の回想	〃
9	学徒出陣	島根県立図書館
10	シベリア抑留記／吉野蕃人	本館
11	戦場の諸相	〃
12	「北支」占領：その実相の断片：日中戦争従軍将兵の遺品と人生から	〃
13	南京引き裂かれた記憶：元兵士と被害者の証言	〃
14	兵士たちの戦後史	〃
15	戦場体験キャラバン：元兵士2500人の証言から	〃
2) 資料が語る戦争体験②～勤労動員にあげくれた学生～（ケース展示）		
1	生物資源・初見先生母からの聞き取り史料（キャプション）	
2	「音楽の友 愛唱歌シリーズ7 軍歌集」	本館
3	「主婦の友 勝利の体当たり生活 新年号」	先人記念館＝旧雑賀教育資料館
4	「のらくろ士官学校の巻」（少年倶楽部新年号付録）	〃
5	雑誌「少年倶楽部」新年号	〃
6	生物資源・初見先生母からの聞き取り史料 キャプションあり	
7	旧制松高物語	本館
8	私と太平洋戦争	〃
9	戦争と民衆：太平洋戦争下の都市生活	〃
10	「銃後」の民衆経験：地域における翼賛運動	〃
11	プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争：135枚が映し出す真実	〃
12	戦争の傷あと	〃
3) 資料が語る戦争体験③～空襲・原爆体験～（テーブル展示）		
1	平和を祈る	松江市立中央図書館
2	沖縄戦が問うもの	本館
3	原爆死の真実：きのこ雲の下で起きていたこと	〃
4	ヒロシマの証言：平和を考える	〃

5	戦争を背負わされて：10代だった9人の証言	本館
6	ドキュメント東京大空襲：発掘された583枚の未公開写真を追う	〃
7	長崎の鐘；マニラの悲劇／永井隆〔著〕．長崎精機原子爆弾記／三菱重工長崎精機製作所〔編〕．雅子斃れず：長崎原子爆弾記／石田雅子〔著〕	〃
8	証言で学ぶ「沖縄問題」：観光しか知らない学生のために	〃
9	都民の空襲体験記録集	〃
10	証言は消えない広島記録Ⅰ：炎の日から20年広島記録	〃
11	東京空襲下の生活日録：「銃後」が戦場化した10ヵ月	〃
12	銃後の動員	〃
13	本土に及ぶ戦禍	〃
14	帝国日本の崩壊	〃
15	東京空襲写真集：決定版：アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録＝The collection of Tokyo air raids photographs／東京大空襲・戦災資料センター編	医学図書館

4) 近隣の戦争被害（テーブル展示）

1	鳥根県における空襲とその時代（新版）	本館
2	鳥根県玉湯町の水上市機基地について	松江市立中央図書館

5) 戦後を生きる（ケース展示）

1	永井隆「いとし子よ」	本館
2	長崎の鐘	〃
3	亡びぬものを	〃
4	この子を残して	〃
5	会報綴り・ファイル	〃
6	会報（創刊号）	〃
7	戦争体験を語り継ぐ集い・パンフレット	〃

○ テーブル展示

1	残してきた風景	本館
2	私の駆け足反省－藤原恒男回想録－	〃
3	自分史私と戦争と	〃
4	「戦争経験」の戦後史：語られた体験／証言／記憶／成田龍一著	〃
5	戦場体験者：沈黙の記録	〃
6	空襲に追われた被害者たちの戦後：東京と重慶消えない記憶	〃
7	シベリア抑留者たちの戦後：冷戦下の世論と運動1945-56年	〃

6) 戦争を語り継ぐ～県内の戦争体験記～（テーブル展示）

1	遥かなる大連	松江市立中央図書館
2	語り継ぐ為に	〃
3	いま甦る山陰海軍航空隊「大社基地」	〃
4	わがとこ聞きある記八雲町	〃
5	ふるさと忌部	〃
6	鹿島わがとこ聞きある記	〃
7	伝えておきたいぼくたちの少年時代	〃
8	戦争と平和を考える	〃

9	満蒙開拓青少年義勇軍の概況とその終焉	鳥根県立図書館
10	激動・昭和の足跡 第2集	〃
11	歩みの跡 遺族会創立三十周年記念文集	〃
12	満州に連れ出された女学生 鳥根県立大東高等女学校皇国農村学徒報国隊	〃
13	ビカー益田からヒロシマ・ナガサキー	松江市立中央図書館

7) なぜ戦争体験を語るのか(テーブル展示)

1	「戦後」はいかに語られるか／成田龍一著	本館
2	戦争記憶論：忘却、変容そして継承／関沢まゆみ編	〃
3	記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争	〃
4	戦後史のなかの生活記録運動：東北農村の青年・女性たち	〃
5	戦後経験を生きる	〃
6	軍隊と地域社会を問う	〃

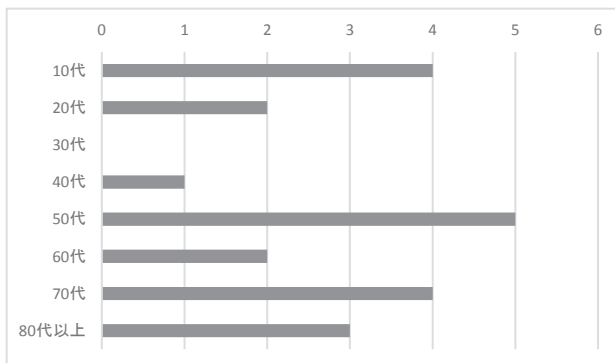
中央平型ケース

1	のぼり(「祝 入営 山村栄吉君」)	先人記念館＝旧雑賀教育資料館
2	雑誌「日の丸」12月号	〃
3	遺品袋	〃
4	遺言書入れ	〃
5	お守り付き腹巻(千人針)	〃
6	寄せ書き日の丸	〃
7	慰問袋(紙製)	〃
8	慰問袋(布製)	〃
9	雑誌付録「大東亜共栄圏地図」(「家の光」創刊十五周年記念付録)	〃
10	雑誌付録「へいたいさん双六」(「国民二年生」正月号付録)	〃

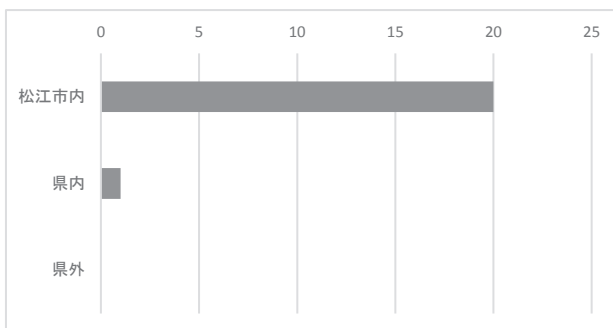
2017.11.27～12.22

1 参加者属性

(1)参加者年代



(2)参加者居住地



(3)参加者区分

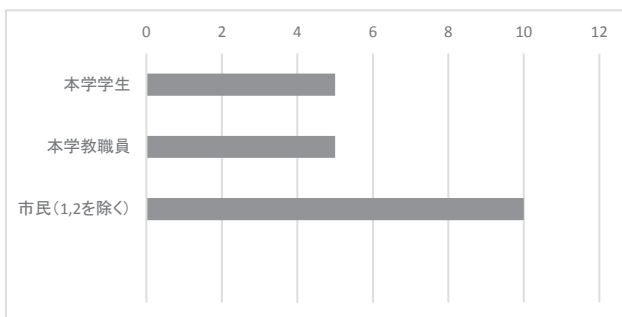
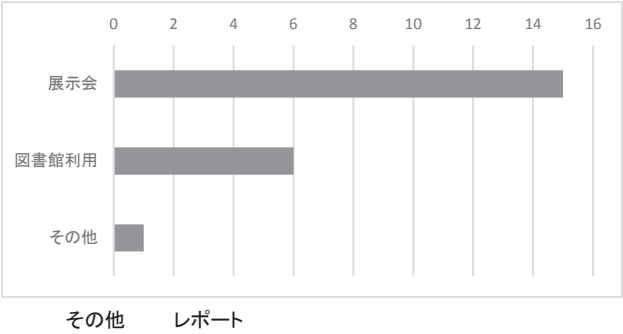
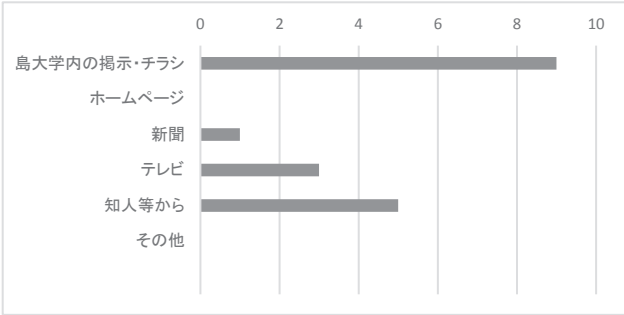


図7 企画展「戦争と平和を考える2017」アンケート集計結果

2 来場目的



3 この展示会を何で知りましたか



4 展示内容について

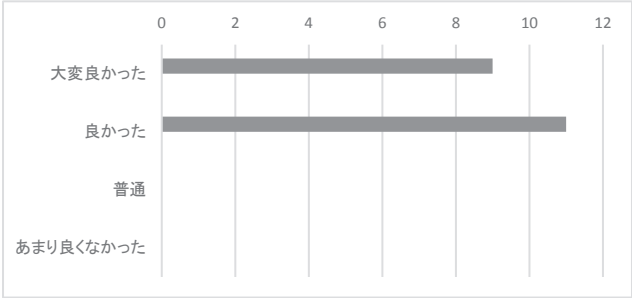


図 8

地域コミュニティラボ —地域の情報を発信する展示スペース—

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ 昌 子 喜 信
島根大学地域未来戦略センター 高 須 佳 奈
島根大学地域未来戦略センター 中 野 洋 平

1. はじめに

2017（平成29）年1月、島根大学附属図書館本館に地域コミュニティラボが開設された。地域コミュニティラボは、本館内の展示スペースを活用して、地域の多様なコミュニティの活動成果や活動状況を発信し、紹介するスペースである。本稿では地域コミュニティラボの概要とこれまでの展示活動を紹介する。

2. 地域コミュニティラボとは

2.1 設置の経緯

地域コミュニティラボは、杉江実郎附属図書館長の構想が具体化されたもので、「地域未来創造人材の育成を加速するオールしまね協働事業」（略称「オールしまねCOC+事業」¹⁾、以下略称で表記する。）を構成する「しまねクリエイティブラボネットワーク事業」の一環として実現したものである。以下に設置の経緯を記す。

2012（平成24）年度に実施された本館の改修工事によって、1階ロビーの一角に展示室が設置され、島根大学史に関する常設展示を行うとともに、本学図書館が所蔵するコレクションを紹介する展示を行ってきたところである。2016（平成28）年には、展示室のより一層の活用を図るために、「島根大学附属図書館展示室運用要項」を制定して、学内外の機関との共催による企画展を連続して開催した²⁾。

これらの展示では、本学図書館や連携機関が所蔵する古典籍や古文書、古地図などを中心とするコレクション資料を紹介する展示が中心だった。一方で地域に目を転ずると企業や行政機関、NPO法人など様々な団体が多彩な

活動を行っている。これらの団体の活動状況や活動成果に、学生や教職員が大学内において身近に触れることができる場を提供することは意義のあることであり、杉江館長によって図書館の展示室を活用することが構想されたのである。

本学は、2015（平成27）年10月に文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（略称「COC+事業」）³⁾の採択を受け、本学が主幹校となって、島根県立大学・島根県立大学短期大学部・松江工業高等専門学校および島根県とともに「オールしまねCOC+事業」に取り組んでいる。この事業では、地域における人材育成を核として、5つのプロジェクトが展開されている⁴⁾。そのプロジェクトの一つである「しまねクリエイティブラボネットワーク事業」（以下「クリエイティブラボ」という。）は、“イノベーションを起こす創造力を育む、多様な人やアイデア・情報が集まる「インキュベーション（孵化）空間」としてのオープンラボ”⁵⁾であり、地域のステークホルダーによる利活用が想定されている。杉江館長の構想による地域の諸団体による展示活動は「クリエイティブラボ」の目的に合ったものであることから、「オールしまねCOC+事業」を推進する地域未来戦略センターと協議を行い、「地域コミュニティラボ」の設置が決まった。

開設記念展示として、島根県銑鉄鋳物工業組合による展示を行い、2017（平成29）年1月31日には、ラボ開設の記者発表を行った。なお、現在「クリエイティブラボ」としては「地域コミュニティラボ」の他に、本学産学連携センターに「技術コミュニティラボ」が設置され、さらに「教育コミュニティラボ」（仮称）の設置が計画されている⁶⁾。

2.2 地域コミュニティラボの目的

地域では地元企業や行政機関、NPO法人などの様々なコミュニティが多彩な活動を行っている。これらのコミュニティの活動や成果に、学生や教職員、本学を訪れた市民が大学内において身近に触れることができるスペースが「地域コミュニティラボ」である。ラボの展示をとおして、本学の学生・教職員や市民がこれまで以上に地域に目を向けて、地元の企業や行政機関、NPO法人などの活動に関心を持ち、これら地域コミュニティをより知ってもらうことを目的としている。そして、本学の地域志向教育や学生の島根県

内への就職、教員とコミュニティとの共同研究・共同事業の推進を図ることを目的とする。

なお、本学では、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」(略称「COC事業」)にも採択され⁷⁾、2013（平成25）年から「課題解決型教育（PBL）による地域協創型人材養成」をテーマにして、全学的な地域志向教育を進めているところである。このCOC事業の一環として、「しまね地域資料リポジトリGO-GURa」（以下「GO-GURa」という。）を2016（平成28）年11月に公開し、運用している^{8) 9)}。GO-GURaは、県内の行政機関や教育・研究機関、NPO法人などが発行している報告書や広報誌などの各種の資料を電子的に蓄積し、インターネット上で公開するもので、Web上の「郷土資料室」の構築を目指している。GO-GURaがバーチャル空間において地域コミュニティの情報のアーカイブと活用を目指しているのに対して、地域コミュニティラボは実空間において地域コミュニティの情報の発信を目指しており、両者は車の両輪のような関係にあるとすることができる。

2.3 展示スペースの概要

「地域コミュニティラボ」として使用する本館の展示スペースは、展示室と館内4か所の壁面を利用した「展示ウォール」である。これらの展示スペースでは、「地域コミュニティラボ」として使用しない時は通常の展示を行う。それぞれの施設の概要は次のとおりである。

2.3.1 展示室

展示室は、正面玄関を入って左側にある。展示室前の棚の配置を変えることで、入館ゲートを入らずに直接展示室に入る動線を作ること、入館ゲートを入ってから展示室に入る動線を作ることでもある。

表1 展示室の諸元

面 積	51㎡	
設 備	展示ケース（施錠可）	
	平型（大）（W1800×D450×H930）	2台
	平型（中）（W1800×D740×H800）	1台
	平型（小）（W1500×D740×H800）	2台
	縦型（W1800×D450×H930）	8台
	自立パネル	
	縦・横いずれでも可（貼付け面1800×1200）	脚付10台
	壁面ピクチャーレール（ワイヤーフック付き）	

2.3.2 展示ウォール

展示ウォールは、壁面を利用した展示用の“壁”である。パネルや絵画の額などの平面的な展示物の展示に適しているが、各種のアタッチメントを取り付けることによって、図書を展示することも可能である。次の表のように館内4か所に設置されている。

表2 展示ウォールの諸元

展示ウォール	1（1階研究ゾーン）	高さ2.3m × 幅6.3m
	2（1階研究ゾーン）	高さ2.3m × 幅3.1m
	3（2階研究ゾーン）	高さ2.3m × 幅6.3m
	4（2階交流ゾーン）	高さ2.3m × 幅4.4m
設 備	展示ウォール専用展示用アタッチメント各種 壁面ピクチャーレール	

2.3.3 展示用備品

前述のような展示スペース備え付けの展示用備品の他に次の備品を用意している。

表3 展示用備品一覧

展示解説用パネル（アルミパネル）	A1、A2、B1、B2の各サイズ
サイン用スタンド	

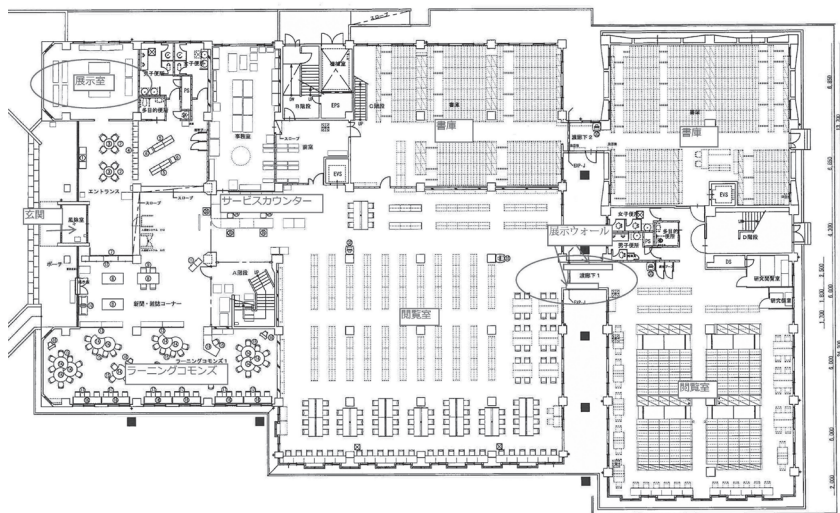


図1 1階平面図

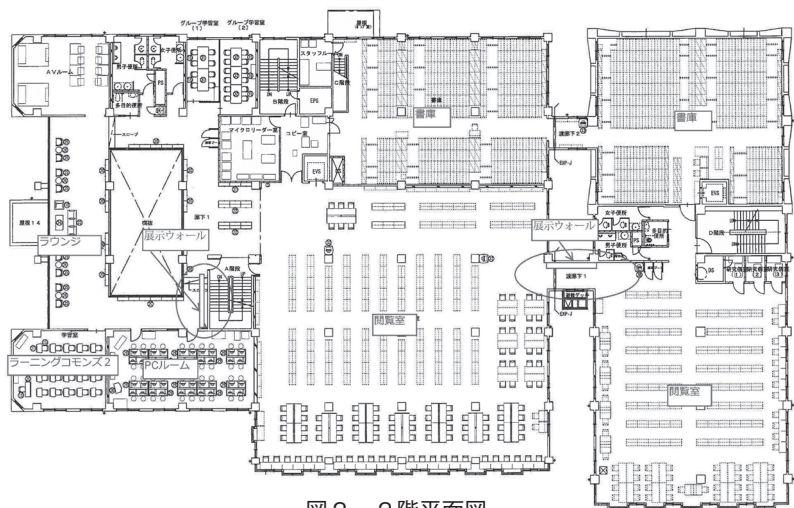


図2 2階平面図

3. 展示

3.1 展示の企画・運用

地域コミュニティラボの展示は、2017（平成29）年1月のラボ開設以来、同年12月現在まで4回開催した。2017（平成29）年度中にさらに2回開催予定である。

展示の企画及び運用は、地域未来戦略センターと附属図書館が連携しながら共同で行っている。展示の企画、出展の呼びかけ、出展者との連絡・調整、広報用ポスターの作成等は地域未来戦略センターが行い、展示室の準備、広報、展示期間中の運用は附属図書館が行っている。展示解説やキャプションの作成、展示品の展示及び撤収は出展者が行う。また、関連イベントとして、出展者によるギャラリートークやトークイベントも開催している。

これまで開催した展示の概要は3.2のとおりである。

3.2 これまでの展示

3.2.1 「鐵の造形—島根県銑鉄鋳物産業の技と匠」展（出展者：島根県銑鉄鋳物工業組合）

（1）展示期間 2017（平成29）年1月28日（土）～ 2月10日（金）

（2）関連イベント

・ギャラリートーク

日 時：2月3日（金）12：00～12：30

会 場：島根大学附属図書館（本館）1F 地域コミュニティラボ（展示室）

案内者：島根県銑鉄鋳物工業組合 理事長 重親守氏

（ヤンマーキャステクノ株式会社 常務取締役 松江事業部長）

・ラボ活用セミナー

日 時：2月3日（金）13：30～15：00

会 場：島根大学附属図書館（本館）3F 多目的室

（3）展示内容

銑鉄鋳物産業は、生産量・生産金額ともに全国第4位を誇る島根県の基幹産業であることは意外に知られていない。本展は、島根県銑鉄鋳物工業組合



図3 ギャリートーク

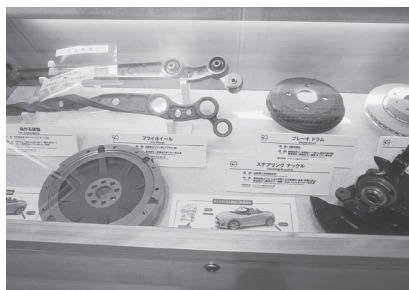


図4 鋳物製品

の加盟企業10社による製品や製造工程の説明パネルを中心に展示した。“鋳物”といえば南部鉄器のような伝統的な製品をイメージしがちだが、エンジンや機械の部品など身近なところで活用されており、現代の私たちの生活になくてはならない技術である。現在では3Dプリンタによって鋳型が製作されるなど、新たな進化を遂げている。展示によって、島根の鋳物産業の広がりに触れることができ、“たたら製鉄”だけではない、もう一つの「鉄の島根」の魅力を知ることができた。

(主な展示資料)

- ・パネル展示：たたらと鋳物の歴史
- ・鉄のふるさとしまねイメージコンテスト入賞作品（3Dプリンタを用いた鋳造作品）
- ・島根県銑鉄鋳物工業組合加盟企業 製品
- ・鋳物用3Dプリンタの出力品（砂型）

3.2.2 「ご縁の国しまね」展（出展者：島根県観光振興課）

（1）展示期間 2017（平成29）年7月1日（土）～7月17日（月）

（2）展示内容

4月から島根に住み始めた新入生を主なターゲットとして島根の良さを伝えようと企画したもので、島根県が展開する観光振興キャンペーン「ご縁の国しまね」と連動して、出雲・石見・隠岐のそれぞれの地域の特徴ある資料の展示を行った。展示では、「ご縁の国しまね」のプロモーション資料に加えて、出雲地方の「たたら製鉄関連資料」や能面、石見地方の「石見銀山関



図5 能面と「ご縁の国しまね」
イメージキャラクター



図6 石見銀山関連資料

連資料」、隠岐地方の「隠岐ユネスコジオパーク関連資料」の展示を行った。

(主な展示資料)

- ・「ご縁の国しまね」イメージキャラクター (EXILE等) 等身大パネル・タペストリー
- ・「たたら侍」パネル
- ・EXILE等の3人が巡る島根旅パネル
- ・たたら製鉄関連資料 (玉鋼・砂鉄など)
- ・能面／「出雲国風土記」関係資料
- ・石見銀山関連資料 (世界遺産認定証〈レプリカ〉・丁銀〈レプリカ〉など)
- ・隠岐ユネスコジオパーク関連資料 (ワニ化石〈レプリカ〉、岩石など)

3.2.3 「三江線へのまなざし」展 (出展者：三江線沿線魅力化プロジェクト、ハーベスト出版〈株式会社谷口印刷〉、島根大学法文学部山陰研究センター)

(1) 展示期間 2017 (平成29) 年10月24日 (火) ～11月6日 (月)

(2) 関連イベント

- ・ラーコモカフェ (展示解説とパネルディスカッション)

日 時：11月1日 (水) 12:00～13:00

会 場：島根大学附属図書館 (本館) 1F ラーニングコモンズ

主 催：島根大学図書館コンシェルジュ

ゲスト：三江線沿線魅力化プロジェクト



図7 ラーコモカフェに先立っての
展示解説



図8 ラーコモカフェ

(3) 展示内容

島根県江津市と広島県三次市を結ぶローカル鉄道の三江線は、平成29年度末で廃線となることが決まり、改めてその価値や沿線地域を見直す取組が活発になってきた。本学の教員と学生がそれぞれ関係して出版された三江線についての2冊の書籍、『三江線BOOK』¹⁰⁾及び『三江線の過去・現在・未来』¹¹⁾をもとにパネル展示を行った。

また、図書館コンシェルジュ主催により、『三江線BOOK』を執筆した三江線沿線魅力化プロジェクトの学生4名をゲストスピーカーに迎えて、トークイベント「ラーコモカフェ」¹²⁾を開催した。ラーコモカフェでは、執筆した学生たちが、取材の時の苦労話や印象に残ったことなどを語り、利用者からは活発に質問が投げかけられた。

3.2.4 「木の匠—木匠展 in 島根大学」(出展者：木匠会)

(1) 展示期間：2017(平成29)年11月8日(水)～11月19日(日)

(2) 関連イベント

・ギャラリートーク

日 時：11月14日(火) 14:00～15:00

会 場：島根大学附属図書館(本館) 1F 地域コミュニティラボ(展示室)

案内者：正木潤氏(木匠会会長)、野白千晴氏(木匠会事務局長)

(3) 展示内容

中国山地の豊かな森林資源に恵まれた島根県では、古くから木工の技術が発達してきた。本展では、島根県の東部地域を中心に創作活動を行う作家グ



図9 ギャラリートーク



図10 展示風景

ループ「木匠会」¹³⁾と協働して、木工作品の展示を行った。指物・刳物・挽物・曲物・彫物といった様々な工芸品から、「木の匠」たちの精緻で奥深い木工芸の世界に触れることができた。

ギャラリートークでは、一つ一つの作品に使われている技法や作品に込められている作者の思いが語られ、また、参加者が実際に木工の技法を体験した。

3.3 評価

各展示会の来場者数は次の表のとおりである。初回の「鐵の造形」展の来場者数は、記帳簿に記録された来場者数をもとに推計した数値である。それ以後は、展示室入口に設置した簡易アクセスカウンターで取得したデータを集計したものである。平日の平均来場者数は、50人弱から70人超だった。

表4 来場者数

展示会名称	展示期間	日数 (日)	来場者 数(人)	1日平均来場者数 (人)		
				平日	休日	全期間
鐵の造形	1月28日(土) ～2月10日(金)	14	900	—	—	64.3
ご縁の国しまね	7月1日(土) ～7月17日(月)	17	980	74.2	29.7	54.4
三江線へのまなざし	10月24日(火) ～11月6日(月)	14	686	64.7	26.0	52.8
木の匠	11月8日(水) ～11月19日(日)	12	409	46.5	9.25	34.1

来場者に対してアンケートを実施した結果を以下に示す¹⁴⁾。回答者の64%が学生であり、教職員（20%）、市民（16%）と続く。実際の来場者数に占めるそれぞれの割合も同様の傾向を示していると考えられる。来場目的を見ると、図書館利用を兼ねて展示を見に来ている人が多いと考えられる。展示内容の満足度は、「大変良かった」「良かった」が85%を占めている。

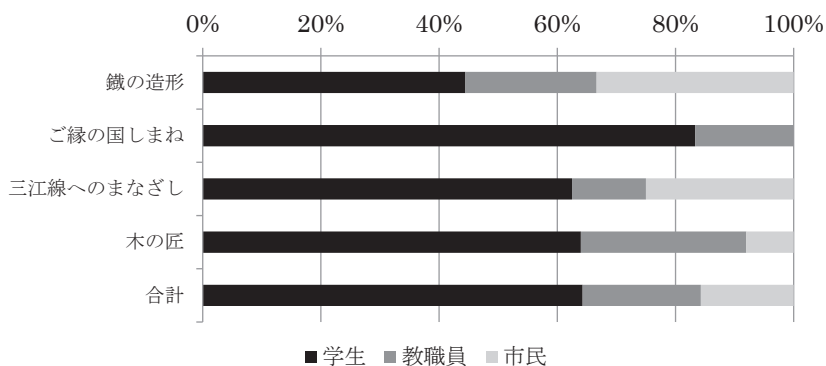


図11 回答者の区分

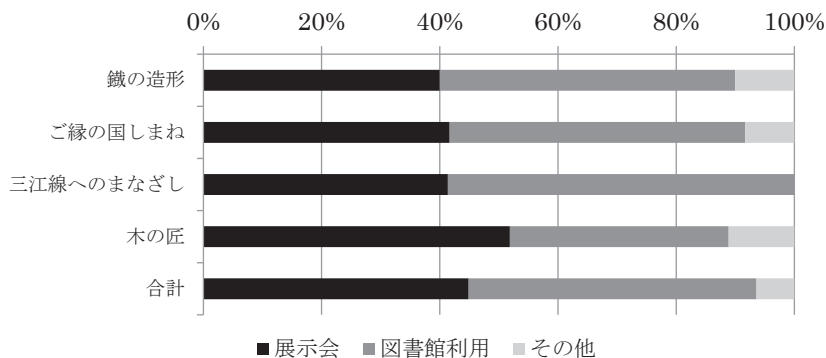


図12 来場目的

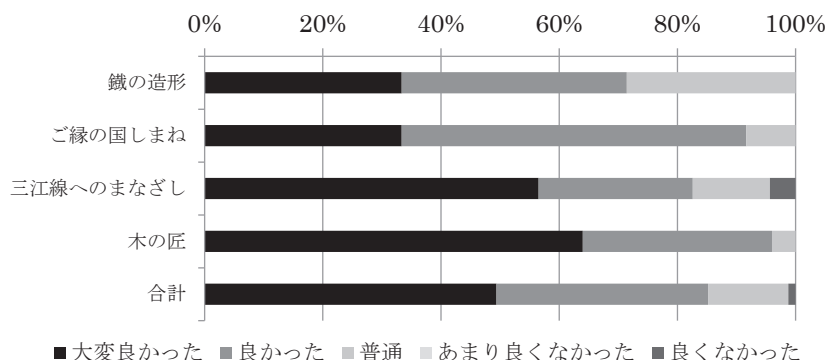


図13 展示内容の満足度

アンケートの自由記述の中から、「評価する意見」と「要望」を抜粋して示す。

評価する意見

「鐵の造形」展

- ・“鉄”をテーマに、企業の取り組みや仕事の内容がわかる非常におもしろい展示だった。
- ・鳥根で作られた製品がどこで活躍しているかをさらに詳しく知りたい。
- ・作業工程の様子をもっと知りたくなった。
- ・気軽に地域の産業、歴史に触れることができるのはよい。

「ご縁の国しまね」展

- ・最近、近くで資料を見る事がなかったので、良かった。図書館で気軽に見られるのがよかった。
- ・実際の史料を展示してあるところが良かった。
- ・近くでデジタルでなく実物の資料を見られて良かった。内容も良かった。石が好きなので、面白かった。

「三江線へのまなざし」展

- ・地域の課題と現実を伝える大変重要なテーマ、内容だった。
- ・三江線が廃止になるのは正直当然のことだろうと思っていたが、今まで

知らなかった価値を知ることができて本当に良かったと思う。

- ・三江線の魅力が伝わった。それと共にこれからのバス事業をどううまくまわすか。市民が安心快適に暮らせるように考えていかなければ。これはどの地域でも通じるところがありそうだった。

「木の匠」展

- ・島根にこのような技術を持った方々の会があることを初めて知った。また、機会があれば拝見したい。
- ・木の素材を生かした作品の中でも曲線の多い作品が印象に残った。作品を作られる過程も気になった。

要望

「ご縁の国しまね」展

- ・場所が少し分かりづらかったので、もう少し分かりやすいように宣伝してほしい。

「三江線へのまなざし」展

- ・公民館で展示されていたものと関連本の拡大コピーのみで残念。
- ・地域のかたのコメントが欲しかった...
- ・視覚的に見やすい展示ならなお良い。

「木の匠」展

- ・作品1つ1つにもう少し説明や作り手の思いなどが示されているとよかった。
- ・アンケートを書けるスペースが欲しい。
- ・実際に触ることができるものもあるとなおよかった。
- ・もう少し長期の展示でもいいのかと思う。

アンケート結果からは、「ラボの展示をとおして、本学の学生・教職員や市民の方がこれまで以上に地域に目を向けて、出展した地域の諸団体の活動に関心を持ち、これら地域コミュニティをより知ってもらおう」という地域コ

コミュニティラボの目的を達成しているものと評価できる。要望については、今後の展示計画の中で改善を図りたい。

地域コミュニティラボの展示は、前述のとおり開設されてから1年の間に4回実施した。地域コミュニティラボ以外の通常の展示¹⁵⁾を含めるとこの期間内に8回開催している。長期休業中の閑散期（2月・3月・8月・9月）には展示を行わないため、閑散期の4か月を除くと月1回の頻度で展示を実施したことになる。展示の開催頻度としては、準備期間、事後のまとめの時間を考慮すると月1回程度が限度であろう。今後の地域コミュニティラボ展示の開催数は、地域コミュニティラボ以外の通常の展示企画の開催数にもよるが、年に4回程度実施するのが適当と思われる。

4. 課題と展望

地域コミュニティラボの設置の経緯からこの1年間の活動を概観した。最後に、ラボを継続して運用していくにあたっての今後の課題と展望をまとめたい。

課題の1点目は、出展者の確保である。現在までのところ、「オールしまねCOC+事業」に賛同する団体に出演を呼びかけて出展者を確保しているが、この方法に加えて今後は、公募による募集や、出展希望者からの申込みによる募集を検討する。公募による募集は、テーマを決めて出展者団体を公募し、出展内容の書類審査を経た後、出展者を決めるものである。公募による方法、申込みによる方法のいずれの方法による場合も、出展者を確保するためには地域コミュニティラボの認知度を高めていく必要があり、効果的な広報のあり方を今後検討する必要がある。

課題の2点目は、評価とフィードバックである。これまでの展示では、来館者数のカウント（簡易アクセスカウンター及び記帳簿への記入）とアンケートを実施し、その結果をもとに評価をして関係者間で共有するとともに、出展者へフィードバックを行ってきた。地域コミュニティラボの展示が観覧者にどのようなインパクトを与えているか、学生、教職員、一般の方それぞれの立場の人ごとにより詳細な調査ができないか、今後検討したい。

今後の展望として2点挙げる。1点目は、教育シーズとしてラボの展示を活用することの可能性である。本学の約7割の学生は他県出身者であり、入

学時に大学立地地域としての島根の魅力を紹介する展示を行うことで、地域の学びの入り口とすることができる。また、全学的に展開している地域に関する授業等と連動した展示を行うことで、授業の理解を深めることが可能となると考えられる。

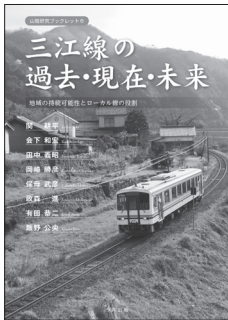
2点目は、本学の研究シーズを地域へPRする場としてラボの展示を活用することが考えられる。オープンキャンパスや大学祭の時など、高校生や地域の人たちが集まる機会において、本学の教育・研究内容や、地域で話題となった産学連携事例や商品開発事例などをPRする場としての活用が考えられよう。

さらに、本学のミュージアムとも連携することで展示内容に奥行きと広がりを作り、本学のML連携＋教育・研究と地域コミュニティの活動が双方向に影響しあって成果と活力を生み出していける場を目指していきたい。

注・参考文献

- 1) “オールしまねCOC+情報ポータルサイト”. (オンライン), <http://www.allshimane.shimane-u.ac.jp/>. (参照 2018-01-02).
- 2) 2016 (平成28) 年度には次の企画展を開催した。
 - ・ 2016.7.11～7.31 松江が生んだ美術史家・相見香雨「自筆調査録」展 (主催：桑原羊次郎・相見香雨研究会／島根大学附属図書館)
 - ・ 2016.8.30～9.13 旧制松江高校出身の異才編集者 花森安治と田所太郎 (主催：島根大学ミュージアム／同 附属図書館)
 - ・ 2016.11.9～11.30 江戸力：手銭家蔵書から見る出雲の文芸 (主催：出雲文化活用プロジェクト〈公益財団法人手銭記念館／島根大学附属図書館／同 法文学部山陰研究センター〉)
 - ・ 2016.12.10～2017.1.22 足立文庫を通じて見る戦前・戦中・戦後 (主催：島根大学法文学部山陰研究センター／同 附属図書館)
- 3) 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室. “地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)”. 文部科学省. 2013-03. (オンライン), http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/index.htm. (参照 2018-01-02).
- 4) 前掲注4)
- 5) 島根大学. “しまねクリエイティブラボネットワーク”. オールしまねCOC+情報ポータルサイト. (オンライン), <http://www.allshimane.shimane-u.ac.jp/project04/>. (参照 2018-01-02).

- 6) 「技術コミュニティーラボ」は、しまね大交流会等で生まれた「人的・技術的交流、コラボレーション」等の機会を活かし、大学・企業間の共同研究から製品や技術開発の促進を目的としたもの。「教育コミュニティーラボ」は、企業と連携した「ものづくり等の教育」を通して、創発力やアントレプレナーとしての資質育成等を目的としたものである。(佐藤利夫島根大学副学長〈地域連携・貢献担当〉の記者発表による)
- 7) 島根大学. “しまだいCOC”. しまだいCOC. (オンライン), <http://www.coc.shimane-u.ac.jp/>. (参照 2018-01-12) .
- 8) 島根大学. “しまね地域資料リポジトリGO-GURa”. しまね地域資料リポジトリGO-GURa. (オンライン), <http://coc.lib.shimane-u.ac.jp/>. (参照 2018-01-12) .
- 9) 中野洋平. しまね地域資料リポジトリGO-GURa構築の取り組み. 図書館雑誌. 2017.6, 111 (6), p.376-377.
- 10) 三江線沿線魅力化プロジェクト編著. 三江線BOOK. ハーベスト出版, 2016.
- 11) 関耕平ほか著. 三江線の過去・現在・未来. 今井出版, 2017.
- 12) ラーコモカフェは、島根大学附属図書館(本館)で活動する図書館コンシェルジュが主催して不定期に開催するトークイベント。ラーニングcommonsを会場にして、毎回テーマを決めてゲストスピーカーと参加者が交流するもの。第1回目は服部学長をゲストに2016年1月に開催。
- 13) 県内で活躍する木工作家らが木工芸の研鑽のために1987(昭和62)年に組織したグループ。その技術と作品を紹介する「木匠展」を隔年で開催している。
- 14) アンケートの回答数は次のとおり。「鐵の造形」展(8名)、「ご縁の国しまね」展(12名)、「三江線へのまなざし」展(24名)、「木の匠」展(25名)
- 15) 2017年1月～12月の間に次の展示を開催した。
 - ・ 2016.12.10～2017.1.22 足立文庫を通じて見る戦前・戦中・戦後(主催：島根大学法文学部山陰研究センター／同 附属図書館)
 - ・ 2017.6.3～6.25 江戸力：献立いろいろ(主催：出雲文化活用プロジェクト〈公益財団法人手銭記念館／島根大学法文学部山陰研究センター／同 附属図書館〉)
 - ・ 2017.10.10～10.22 島根大学附属図書館教科書コレクションにみる教科書のあゆみ(主催：島根大学附属図書館)
 - ・ 2017.11.27～12.22 戦争と平和を考える：記録された戦争体験(主催：島根大学附属図書館)



自著紹介

『山陰研究ブックレット6 三江線の過去・現在・未来： 地域の持続可能性とローカル線の役割』

(島根大学法文学部山陰研究センター、2017年3月)

関 耕 平

(島根大学法文学部法経学科准教授)

JR三江線は島根県江津から広島県三次までをつなぐ108キロ余りのローカル鉄道である。車窓からののどかな田園の情景、江の川に沿って走る風光明媚な風景など、大変魅力的な路線であるが、残念ながら2018年3月末での廃線が決まっている。

2015年10月の出勤直後の早朝、大学事務室で「三江線廃止へ」という山陰中央新報一面の見出しが目飛び込んできた。そのときの衝撃がいまだに忘れられない。収支が全くあわなくて年間9億円の赤字。誰も乗らない。確かに分が悪い。しかしこのまま三江線廃線という既成事実が積み重なってしまうことが、地域再生にむけて模索を続ける沿線地方にとって負の意味で象徴的な出来事になってしまうのではないか、経済性や採算性だけではなく、多様で多面的な価値でもって評価するという社会の方向性がより狭められてしまう

のではないか、そんな危機感が頭をもたげた。

その後、この問題に関する住民説明会に参加するなかで、多くの沿線住民の声—受け止める人によっては郷愁や感情論として片づけられるかもしれない意見—を聞きながら、こうした思いをいったん受け止め、この背後にある事実をできるだけ説得的に示しながら、今後の廃線をめぐる論議を深められればと考え、専門外でありながら蛮勇を奮って本書の刊行準備を始めた。

本書は三江線廃線で失ってしまうものに思いをはせながら、本学の教員を中心に8名によって執筆された。タイトル通り、過去、現在、未来の3部で構成されている。

「第一部 三江線の過去」では、三江線が体现している江の川流域・沿線地域のつながりと歴史的重みが、縄文・弥生の時代にまでさかの

よりながら示される。さらに三江線沿線地域および敷設の歴史的経緯が明らかにされている。

「第二部 三江線の現在」では、廃線までの経緯を振り返り、廃線やむなしとしたJR西日本が示す論理を検討している。また、関係各主体の廃線問題への対応を検証するとともに、同様に廃線の危機に直面した名松線（三重県）の復旧過程から、県が果たす役割の重要性を示している。さらにそれぞれの現場で廃線問題に向き合い三江線の利活用に取り組んでこられた沿線の観光協会の方々にその思いを執筆いただいた。

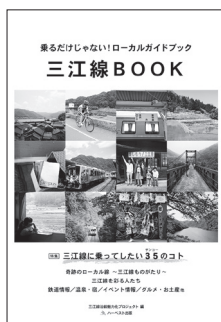
「第三部 三江線の未来」では、広島県にある可部線を事例に、すでに廃線となった沿線地域の実態を明らかにし、教訓を示している。また、三江線廃線後の地域公共交通（バス代替）のあり方について重要なポイントや関係主体による関与のあり方を検討している。また、今後のローカル線の維持に向けた根拠としての「交通権」の考え方を示し、これを支える財政的な仕組みも描いている。

2017年12月現在、廃線の前に一度は乗っておこうと全国から三江線に

乗客が押し寄せている。記念の入場券・乗車券が発売されるなどの廃線直前の活況は「葬式商売」と揶揄される。本書がこの「葬式商売」に該当するようなことはあってはならないと筆者は考えている。廃線後も沿線地域の魅力は薄れることはないし、地域を維持していくことの重要性は変わらない。廃線後の地域のこれからを展望しながら、沿線住民による多くの取り組みがはじまっている。本学の教員・学生にはぜひ、こうした動きを応援、後押ししてほしい。

三江線の廃線問題は、沿線地域の固有の問題である。しかしそれは同時に、効率性や独立採算だけでは回らない地域・地方に、日本全体がどう向き合っていくのか、という普遍性を持った問題でもある。本書が、こうした問いに多くの方々に向き合うきっかけになれば幸いである。





自著紹介

『三江線BOOK： 乗るだけじゃない！ローカルガイドブック』

(ハーベスト出版、2016年11月)

橋 本 佳 奈

(島根大学法文学部法経学科3年)

本書は「三江線沿線魅力化プロジェクト」の一環として制作された、JR三江線と沿線地域の魅力がぎゅっと詰まったローカルガイドブックです。島根大学の学生を中心とした編集スタッフが実際に三江線に乗って沿線各地域をめぐり、自分達の足で歩いて見つけ、そして体験した、様々なおすすめポイントを紹介しています。

三江線は、島根県江津市の江津駅から広島県三次市の三次駅までを結ぶ、全長108.1kmのローカル線です。明治時代中期に陰陽鉄道の建設願いが出されてから1975年8月31日の全線開通までは、太平洋戦争による工事の中断やダム建設計画の問題など数多くの危機がありました。本書では、その度に危機を乗り越えてきた三江線の歴史を当時の写真とともに「奇跡のローカル線～三江線ものごと～」としてまとめています。

何度も危機を乗り越えてきた三江線ですが、2015年秋、JR西日本によって三江線のバス転換が提案され、路線廃止に向けての検討が開始されました。

これを受け、三江線を見て育った江津市の青年（三江線沿線魅力化プロジェクト実行委員長）が「三江線の将来は厳しいかもしれないけれど、沿線地域を魅力ある地域にしていけば、きっと訪れる人が増え、地域が少しでも元気になるのではないか」という思いから、2016年3月に「三江線沿線魅力化プロジェクト」を立ち上げました。そしてクラウドファンディング「READY FOR?」で支援を募り、全国の三江線および沿線地域を愛する人々から寄せられた資金をもとに完成したのが本書です。

本書では、三江線にかけて「三江線に乗ってしたい35（サンコー）の

コト」という特集を組んでおり、編集スタッフが見つけた「三江線をより楽しむためにぜひここを見てほしい」というイチオシの魅力をひとりひとつずつ取り上げ、記事にしました。沿線にあるカフェの紹介、江の川でのカヌー、108.1kmを自転車で走破、温泉や商店など、様々な視点から三江線沿線の魅力について語りました。

また「駅ノート」や各駅のおもしろ情報など、駅そのものが楽しめるようなページや、橋や川、水門などといった川沿いを走る三江線ならではの情報、美術館など沿線スポット、自然や景観、ご当地グルメなどについていくつかの小さな記事をまとめて紹介しています。他のガイドブックには載っていないような、独特の捉え方で編集スタッフが感じたままの三江線の魅力を紹介しているのが特徴です。

この特集の他にも、ローカルジャーナリストの田中輝美さんが地域で輝く人取材した「三江線を彩る人たち」、鉄道情報や地域のイベント情報、おすすめローカルフードやお土産、宿・温泉情報など、三江

線に乗って出かける旅で役立つ情報を掲載しています。

島根大学の学生が、三江線をきっかけに地域について考え、地域を感じ、写真や記事を通してそれらの魅力を伝えることを目指したのが本書です。何度も話し合いや合宿を行い、編集スタッフみんなで推敲を重ねました。三江線は2018年3月に廃線になってしまいましたが、廃線後も沿線の魅力はずっと残るはずです。この本を手に、三江線沿線地域に足を運んでもらい、私たちが感じたたくさんの魅力を多くの方々にも見てほしいです。



石見築瀬駅にて（著者撮影）



自著紹介

『パワフル・ラーニング：社会に開かれた学びと理解をつくる』

(北大路書房、2017年5月)

深見俊崇

(島根大学教育学部初等教育開発講座准教授)

本書『パワフル・ラーニング—社会に開かれた学びと理解をつくる』は、L. ダーリングーハモンド編著の“*Powerful Learning: What We Know About Teaching for Understanding*” (2008) の全訳である。2015年に出版社と本書に関する出版の交渉を開始し、2016年度約1年間をかけて共訳者と翻訳を進めてきた。オビには、「表層的で形骸化されたアクティブ・ラーニングを超えて」とのメッセージが記されているが、本書は、世に飛び交う「アクティブ・ラーニング」を批判的に検討するために出版したものである。

ここ数年間、高等教育から初等・中等教育に至るまで、「アクティブ・ラーニング」に関する盛り上がりは凄まじいものがあった。2017年の学習指導要領改訂にあたって、「主体的・対話的で深い学び（「アクティ

ブ・ラーニング」の視点からの授業改善）」と「アクティブ・ラーニング」の表現そのものは後退したものの、約10年後の次期学習指導要領の改訂まではこの流れのまま進んでいく。

しかし、「アクティブ・ラーニング」として目にするものの大半は、児童・生徒また学生を「アクティブ」にするための指導方法や学習形態の議論に終始するものが多い。例えば、児童・生徒また学生が何らかの活動に従事したり、話し合いやディスカッションを展開したりするために何をすればよいかを紹介した授業実践の記録やマニュアル本も数多く出版されている。ところが、その内容に関して、先行研究の裏付けが怪しいものも少なからずある。

それに対して、本書は、学習科学の知見等の数百の先行研究に基づいて、指導方略、カリキュラム、評価のあるべき姿を描き出している。「ア

クティブ・ラーニング」に関する国内の文献でこれだけの先行研究を紐解いた文献は皆無に等しい。

とりわけ、「アクティブ・ラーニング」が指導方法や学習形態のレベルの議論が中心になっている中、本書は「学問」(教科)の本質から考えることがテーマとなっている。「数学教育」(第3章)や「科学教育」(第4章)が国際的にいかなる観点で論じられているかは、日本における教科教育の問題点を浮き彫りにするものでもある。

2017年の学習指導要領改訂にあたってもう1つの目玉となるものが、「社会に開かれた教育課程」である。これと直接的に関連する本書のテーマが「真正性」である。「社会に開かれた」という意味を考えるにあたって、「真正の活動」「真正の学習」「真正の評価」とは何かを理解できる具体的な事例が本書にはふんだんに盛り込まれている。「真正性」そのものは、日本でもこれまで紹介されてきた。しかしながら日本では、日常場面が設定された教材や問題だったり、校外学習や地域交流だったり極めて狭い意味で取り上げられてきた。一方、本書では「真正性」として、例えば科学を学ぶことは「科学者」と同様の活動に従事

することだと考えられている。日本でもプロジェクトベースの実践自体は存在するが、本書で実践されているレベルのものがあるかと問われれば極めて少ないと言わざるを得ないだろう。

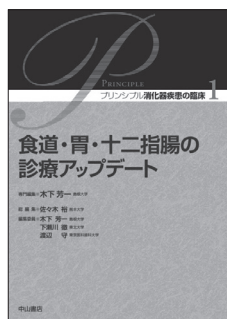
本書の優れた点は、児童・生徒の実践の具体が見えることである。本書は、Edutopia (<https://www.edutopia.org/>) と連動して執筆されており、コラムで紹介されている実践の様子を動画で見ることができる。海外の実践を紹介する書籍や論文の多くは、言葉だけで表現されるため、実践のイメージをつかむことが難しかった。それに対して本書は、実践の様子だけでなく、扱っている教材や教室環境も映像を通して理解できる。

編訳者として力を入れたポイントが2つある。その1つが訳註である。可能な限り訳註を本文に入れており、本書の内容理解を促すよう心がけている。もう1つは索引である。本書に登場するキーワードを索引で取り上げただけでなく、それらが掲載されたページに関してはほぼすべて参照できるようにした。例えば、「カリキュラム」という言葉は本書で頻出するが、それが登場するページを網羅している。それゆえ、索引

を辿ることで、カリキュラムがどのような文脈で用いられているかを掴むことができる。

ぜひ本書を手にとって頂き、そこに広がる豊かでクリエイティブな学びの世界、子どもたちの可能性等を読み取ってもらいたい。本書を読めばワクワクするような学びの楽しさを感じることができるだろう。まさにそれが真の意味での「アクティブ・ラーニング」なのである。





自著紹介

『プリンシプル消化器疾患の臨床1 食道・胃・十二指腸の診療アップデート』

(中山書店、2017年2月)

木下芳一

(島根大学医学部医学科内科学講座内科学第二教授)

上部消化管、下部消化管、胆膵、肝臓のそれぞれの領域を専門領域とする4人の教授が集まって、消化器疾患の専門医が最新の標準的な消化器内科領域の知識に触れることができるような教科書を作成しようと相談して出来上がったのが、この教科書「プリンシプル消化器疾患の臨床」シリーズです。全4巻ですが、最初に完成したのが上部消化管領域の疾患を対象とした本書『食道・胃・十二指腸の診療アップデート』です。本書の大まかな構成は熊本大学の佐々木裕教授、東北大学の下瀬川徹教授、東京医科歯科大学の渡辺守教授と一緒にさせていただきましたが、細かい編集は上部消化管を担当した私が行いました。

まず、本書は消化器領域の専門医を対象として作られています。消化器内科や消化器外科の専門医を取得することを目指している方、すでに

専門医をお持ちの方を対象として作られていますので、専門的で特殊な内容でも最新の知識と技術に関する情報が記載されています。むづかしいところもありますが、本書全体をご覧くださいますと大規模メディカルセンターでの最新医療の内容を理解していただくことができると思います。もちろん執筆は各領域における国内トップレベルの専門医にいただいています。

構成は、まず総論として疾患にかわりのある上部消化管の病態生理の解説が記載されています。それぞれの臓器の生理機能を理解し、その不調時にどのような病態が起こりうるのかを理解するのに役立つだろうと思います。次いで診療に使われる検査が解説されています。一般的なものだけではなく、high resolution manometryやバロスタット検査、EUS-FNABなどの特殊な最新の検

査も詳しく解説されています。次に治療の部分では複数の疾患の治療に用いられている薬剤だけではなく、内視鏡的な治療や外科治療がまとめられています。最近では内視鏡治療と外科治療の境界が不明確となっており、経口的な内視鏡治療で消化管の筋層を切開するような治療まで行われるようになっていきます。そのような治療における最先端の現状を理解いただけたと思います。そして最後に各論として、ほぼすべての上部消化管疾患に関する詳しい解説が記載されています。さらにはミニレクチャーとして、最近話題の口腔内細菌やGNAS mutationの研究成果も解説していただきました。

記載内容は専門医向けですが、カラー印刷と写真が多用されており、わかりやすい紙面となっていますので、一見すると医学生用の教科書に

見えてしまいます。ところが記載内容を読み始めるとそれぞれの領域でトップの方が執筆されていますので、文章がこなれていて大変読みやすい中にもきらりと光る最新知識が埋め込まれているのが分かります。

本書の執筆には私に加えて、島根大学医学部薬理学講座の和田孝一郎教授、島根大学の卒業生で国際医療福祉大学消化器内科の天野祐二教授、島根大学医学部内科学講座第二の石村典久先生、川島耕作先生、やはり島根大学医学部の卒業生の出雲市総合医療センター内科の駒澤慶憲先生にもお願いして、すばらしい解説を執筆いただいています。

島根大学医学部ゆかりの先生方が皆さん協力して作成された専門医向けの教科書です。消化器疾患の診療にたずさわる先生方はぜひ一度手に取っていただければ幸いです。





自著紹介

『ユニバーサルトイレ： 多様な利用者のための環境デザイン手法』

(彰国社、2017年3月)

田中直人

(島根大学大学院総合理工学研究科特任教授)

ユニバーサルデザインは、年齢や身体能力に関わらず、できるだけ多くの人が美しいと感じ、かつ容易に使えるよう製品や建築物をデザインするという考え方である。筆者らはこれまで行ってきた調査研究から得られた知見をもとに、国連10年記念施設：国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）やSCイオンレイクタウンなどにおける設計・監修などでユニバーサルデザインを実践しながら検証し、新たな提案を試みるプロセスを繰り返してきた。これらのユニバーサルデザインに関する一連の取組みを「建築・都市のユニバーサルデザイン—その考え方と実践手法」（彰国社、2012）として本書に先立ち発刊したが、ユニバーサルデザインへの実践手法を提示するものとして、2014年に日本建築学会著作賞をいただいている。

本書はユニバーサルデザインとし

て展開する公共トイレを「ユニバーサルトイレ」と称し、これまでの筆者らの一連の調査研究結果や公共的な施設で計画・デザインを試みた公共トイレの検証結果などからの知見にもとづいて、多様な人の利用を想定したデザインモデルを環境デザイン手法として提示するものである。

第1章では日本の公共トイレの現状と課題について、第2章では多様な利用者の属性に注目し、公共トイレの利用実態調査の結果などから配慮すべき課題を整理するとともに、その配慮方法を示している。第3章ではユニバーサルデザインとしての公共トイレのあり方を属性別の整備課題をふまえて、具体的な公共トイレの計画・デザインモデルを示しながら、その解決に向けた手法を提案している。専門の研究者や建築関係者に限らず、学生や一般市民にも多くの事例や親しみやすく美しい図や

スケッチなど用いて理解しやすいよう工夫している。

かつて、公共トイレには4K（怖い、汚い、暗い、臭い）と表現されていたマイナスイメージがあった。しかし近年、まちづくりとして、公共トイレに関心をもつ市民や行政、あるいはトイレに関係する専門事業者、デザイナーなどの取組みもあり、これまでのイメージを一新するような事例も登場している。加えて公共施設に限らず、商業施設などにおいても、美しく、快適なトイレはお客様サービスの向上に寄与するものとして整備されている。つまり4Kの解消に加え、福祉のまちづくりとして、従来のトイレ空間に欠落していたバリアフリーデザインが導入されはじめている。多様な利用者にとって、安全快適なユニバーサルトイレの実現が期待される（図）。

しかし、現状としてはこれまでの調査研究からも明らかなように、公

共トイレに関する課題は多い。例えば、ユニバーサルデザインとして整備された「多機能トイレ」は、機能が充実したため、ここでもしか用が足せない車いす利用の人や介助が必要な人以外の人たちの利用も増え、常に“使用中”となり数不足が問題となっている。さらには異性介助やLGBT等の性に関する配慮など、新たな視点や条件からトイレのあり方を検討する必要が出てきている。

トイレについては、便器などのもののレベルからトイレ環境ともいうべきトータルな生活環境の一部として捉え、計画、デザインされるべきと考える。新しい材料や技術を踏まえたデザインの可能性は大きく、これからの進化するトイレ環境の創造が期待される。今後も多くの関係者の皆様と協働して、公共トイレのユニバーサルデザインへのスパイラルアップを図る礎として、本書がお役に立つことを願っている。

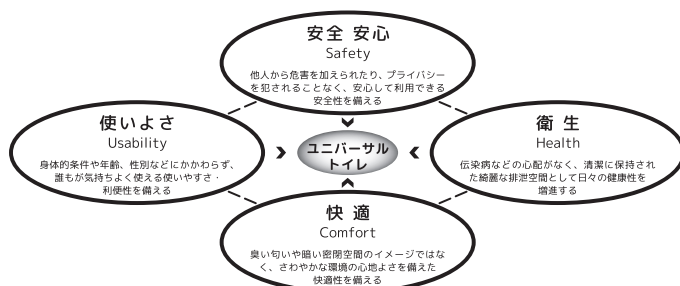


図 トイレの4Kに代わる新たなキーワード

原稿募集

—『淞雲』原稿執筆の手引き—

1 編集方針

本誌は、島根大学附属図書館が編集・発行する雑誌です。本誌は、島根大学附属図書館の利用者である学生及び教職員を主な対象読者として、大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果や附属図書館の活動報告、資料紹介等を掲載します。学生や教職員の皆様からの投稿も広く受け付けます。

2 投稿規定

(1) 原稿の種類

島根大学附属図書館及び大学図書館、公共図書館など図書館に関する内容の調査・研究成果や活動報告、資料紹介等で、次の種類に該当するものとします。

論文	図書館及び図書館資料に関連するオリジナルの研究論文
報告	図書館業務・サービスに関連する報告、図書館資料に関連する報告（資料紹介など）
短報	本学教員自著紹介、書評、図書館に関連するショートエッセイ
その他	館長が必要と認めるもの

(2) 原稿の提出・問い合わせ先

電子メール本文に以下の必要事項を明記のうえ、次の提出先に提出してください。

・必要事項

- ①投稿希望（論文・報告・短報・その他 のいずれかを選択してください）
- ②投稿者所属および氏名
- ③論題（縦書き・横書き のいずれかを選択してください）

・提出先

島根大学附属図書館広報チーム（『淞雲』編集委員会）

e-mail : library@lib.shimane-u.ac.jp

TEL : 0852-32-6088 (内線) 2780

(3) 原稿の査読

本誌に掲載する記事は、内容に応じて編集委員会または、編集委員会が依頼する査読者による査読を行い、査読結果に応じて、著者に対して、原稿の修正、改善をお願いすることがあります。

(4) 著作権

本誌に掲載された記事の著作権は、著者に帰属します。ただし、本誌は冊子で発行するとともに電子版を公開するため、事前に電子化に伴う複製及び送信可能可並びに公衆送信を許諾していただきます。

(5) 校正

初校のみ著者校正をお願いします。

(6) 学術情報リポジトリSWANへの掲載

掲載された記事は、島根大学学術情報リポジトリSWANへ掲載し、インターネット上に公開します。

(7) 掲載原稿の取扱い

提出された原稿は、原則として返却しません。

(8) 謝礼

執筆者1名につき、掲載号1部ご希望により別刷り20部まで贈呈します。

3 原稿執筆要領

(1) 原稿の形式

原稿の本文はテキスト形式、MS-Word、または一太郎形式とします。

(2) 原稿の長さ

本文の長さは、記事種別に応じて、概ね次のページ数（図表、写真含む）に収まるようにしてください。

横書き：A4判 1ページあたり34文字×31行（1,054文字）

縦書き：A4判 1ページあたり25文字×20行×2段（1,000文字）

*刷り上がりはA5判となります。

論文・報告 4～20ページ以内

短報 2 ページ（短報の刷り上がりは横書き 2 段組になります）

(3) 原稿の書き方

- ①文章はわかりやすく、冗長にならないよう簡潔に表現してください。
- ②文章は「である」調、「です・ます」調のいずれでも可とします。内容にふさわしい文体としてください。
- ③章・節・項などの見出しをつける場合は、原則としてポイント・システムを使用してください。

例) 第 1 章 → 1

第 1 章, 第 1 節 → 1.1

第 1 章, 第 1 節, 第 1 項 → 1.1.1

項以下の細分 → (1)

- ④写真、図、表には、例のようにそれぞれ一連番号と簡潔なタイトルを付し、本文中に挿入するか、または、挿入箇所を明示して、別ファイルとしてください。本文中に図、表を挿入する場合においても、図、表は本文とは別ファイルとしてください。

例) 図 1 システム概要

表 1 メタデータ項目一覧

- ⑤文献を参照または引用した場合は、本文の該当箇所の右肩に、1), 2), 3) …のように一連番号を付して、本文末尾に参考文献・引用文献の書誌事項を記載してください。参考文献・引用文献の記載方法は、原則として「科学技術情報流通技術基準 参考文献の書き方 (SIST02)」(URL http://sti.jst.go.jp/sist/handbook/sist02_2007/main.htm) に従ってください。
- ⑥他の著作物から転載する場合、及び図（写真を含む）、表を使用する場合は、事前に著作権者の許諾をとって下さい。

2016.11.16改訂

淞 雲

島根大学附属図書館報 第20号

2018（平成30）年3月28日 発行

編集・発行 島根大学附属図書館

本 館 〒690-8504 松江市西川津町1060
TEL (0852) 32-6083 FAX 32-6089

医学図書館 〒693-8501 出雲市塩冶町89-1
TEL (0853) 20-2092 FAX 20-2095

印 刷 今井印刷株式会社



島根大学附属図書館